身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現

Overcoming social division and achieving diversity through embodiment

床呂郁哉 編

第一回
公開シンポジウム

日本学術振興会・受託研究課題「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」(学術知共創)
AA研基幹研究人類学「社会性の人類学的探求：トランスカルチャー状況と寛容/不寛容の機序」

日本学術振興会・受託研究課題「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」（学術知共創）
『身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現』
二〇二三年度　公開シンポジウム

第一回公開シンポジウム
身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現

日　時：二〇二四年二月十一日（日）十四：〇〇～十八：三〇
会　場：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（ＡＡ研）
三階大会議室（三〇三号室）

序・謝辞

本冊子は、二〇二四年二月十一日（日）に実施されたシンポジウム「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」の記録である。

同シンポジウムは、日本学術振興会・受託研究課題「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」（学術知共創）

及び東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下、「ＡＡ研」）基幹研究人類学班との共催で実施された。

本冊子はその成果出版であり、刊行はＡＡ研からの予算措置によって可能となった。改めてＡＡ研並びに上記科研課題の関係者にこの場を借りて感謝する次第である。

日本学術振興会・受託研究課題「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」（学術知共創）
『身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現』
二〇二三年度　公開シンポジウム

Ⅰ　趣旨説明　床呂　郁哉（ＡＡ研）　1

Ⅱ　報告

「ユニバーサル・ミュージアムとは何か
―触察鑑賞の文化史的意義をめぐって」　広瀬　浩二郎（国立民族学博物館）　13

「心理学の視点から顔身体の概念を再考する」　高橋　康介（立命館大学）　28

「『ダンス村』―私たちを引き離し、私たちを結びつくもの　ケイトリン・コーカー（北海道大学）　46

Ⅲ　コメント

コメント一　小手川　正二郎（國學院大學）　59

コメント二　大石　高典（東京外国語大学）　64

Ⅳ　総合討論　71
Ⅴ　閉会　103

Ⅰ　趣旨説明

床呂　郁哉（ＡＡ研所員）

予定の開始時間になりましたので、本日のシンポジウム「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」第一回公開シンポジウムを開始させていただきます。私は本日の司会と進行を務めさせいただきます東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（略称ＡＡ研）の床呂と申します。よろしくお願いいたします。

（以下スライド併用）

#1-2

本日のシンポジウムは、ＡＡ研の基幹研究人類学班と日本学術振興会の学術知共創プログラムの研究課題、同じタイトルのシンポジウム、同じタイトルの課題との共催になります。後ほどメインのイベントとして三人の講演者、ご発表者の方からの説明とディスカッションがあろうかと思いますけども、それに先立ちまして私の方からシンポジウム、そしてシンポジウムの母体となっている本プロジェクトについての説明を最初に簡単にさせていただきます。よろしくお願いします。

#3

この「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」は、基本的には日本学術振興会からの受託研究課題として、本年度二〇二三年度から二十八年度まで、少し長いですけれど

も六か年の学際的な共同研究として、文化人類学や地域研究をはじめとして、心理学、認知科学、哲学、障害学、アート研究といったさまざまな分野の先生方にご協力をお願いしております。まず、プロジェクトの問題意識、研究の背景と目的から説明させていただきたいと思います。

いわゆるグローバル化や社会の複雑化などを背景として、近年、例えば人種・民族等の差による分断や差別、あるいはジェンダーや障害の有無などの指標による分断や差別などがますます可視化する傾向にあるといえるかと思います。こうした差別や分断の問題に関しては、従来、各国の政治・経済的構造やグローバルなネオリベラルな資本主義のメカニズム、あるいは各国の政策・制度といった、どちらかというとマクロな視点からの研究が発展してきました。それと比べると、よりミクロな日常的な文脈からの研究は相対的に立ち後れていると言っていいのではないかと思います。こうした問題意識を前提として、われわれは今回、よりミクロな、といいますかローカルな身体経験からこうした問題にアプローチしていこうということを提唱いたしました。言い換えれば、身体性の次元からのアプローチということです。

より具体的に申し上げますと、例えば、必ずしも言語化されないようないわば暗黙知的な認知のプロセスや身体的応答といった次元まで踏み込んで、こうした問題にアプローチすることができないだろうかということです。例えば今回の共同研究は認知科学の専門の研究者の方々、それから、後ほどコメンテーターの小手川先生から哲学の観点からコメントをいただきますけれども、人種の現象学というような問題領域からのアプローチ、あるいは本日も東京大学の工藤先生にご参加いただいていますけれども、運動科学の分野からのアプローチなども含み込んでいく。さらに、例えば人類学、私自身は人類学が専門なのですが、人類学や地域研究、あるいは障害学をテーマとする先生にもご参加いただき、世界各地の多様な身

体的な実践の次元に焦点を当てて差別や分断を超克していくこと、あるいは多様性の実現に向けた学問的な視座を構築できないだろうかという問題意識から出発してまいりました。その過程では、狭い意味の研究者だけでなくて、例えばアーティスト、障害を持つ当事者の方々、ＮＰＯ関係の方々など、多様なステークホルダーの方々とも協働し、共に作り上げていく（共創）ということも六年間を通じて実現できればいいということも考えています。

＃4

次に、より学問的な内容についてもう少し踏み込んで説明させていただきたいと思います。今回のわれわれの共同研究のプロジェクトでは、「身体に関する多様で変容的なパラダイム」の構築を提唱しています。これはどういうことかと申しますと、ともすると従来の通念的な身体観は、暗黙のうちにある種の普遍主義的（ユニバーサリスティック）な身体観、もしくは静態的（スタティック）な身体観を前提としていた場合があるのではないか、そのことが差別や分断の問題とも無関係ではないのではないかということから出発しました。それを多様性と変容というキーワードに注目しながら、新しい身体観に組み替えていくことはできないだろうかと考えています。キャッチフレーズ的に申しますと、固定的な身体観から変容可能な身体観へということです。

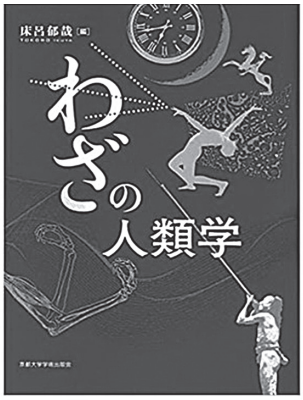
この多様性に関しては、近年さまざまな領域で皆さまも耳にされることが多いかと思います。身体の次元に関しても、ともすると通念的な身体観の中で暗黙のうちに普遍主義的（ユニバーサリスティック）な、これは実は裏を返せば、往々にして西洋中心的な身体観のバイアスがある場合も多々あろうかと思いますが、こうしたバイアスを可能な限り克服していく。そのために、われわれのプロジェクトではアジアやアフリカなどを含む各地の多様な身体実践、もしくは身体表現にも注目していきたいと考えています。

もう一つのキーワードとして、変容（transformation）もしくは変身（metamorphose）ということも掲げています。身体に関しては、人類学関係の方はよくご存じかと思いますけれども、例えばマルセル・モースの身体技法やブルデューのハビトゥスなど、さまざまな先行研究の概念等があろうかと思います。こうした概念を継承しつつも、さらに批判的に発展させ、深化させていくことで、例えば「他者に成る／変身する」ような可能性までも含み込んだ、より動態的（ダイナミック）で生成的な身体に関するパラダイムを構築できないだろうかということを、この六年間かけて考えていきたいと思っています。

＃5-6

われわれのこのプロジェクトでは、例えば人種、障害の有無、ジェンダーなど、さまざまな分断等を扱っていくわけですけれども、その際に今回の研究プロジェクトの中では、いずれも見え姿（アピアランス）や身体的なインタラクションなど、ミクロな身体的もしくは日常的次元からアプローチできないだろうかと考えています。ただ、身体を研究すると一口に言っても、いろいろな切り口があろうかと思いますが、われわれが問題意識としてある種前提としていきたいと考えているのは、身体を単に他から切り離されたいわばスタンドアローン的な存在として見るのではなくて、むしろある人の身体を取り巻く他者の身体性との関係、他の生き物、あるいは場合によっては人工物などを含み込んだような広い意味での生態学的な環境の中における身体ということに注目します。あるいは文化人類学においては、言わずもがなかもしれませんが、ローカルな社会・文化的なコンテクストの中における身体ということに注目していきたいと考えています。

こうした問題意識に関しては、今回のプロジェクトの共同研究者としてご参加いただいている立教大学の哲学がご専門の河野哲也先生は、長年にわたって、いわゆるギブソニアン的



＃6

なアプローチも流用しながら、心や体に関する生態学的なアプローチ、すなわちエコロジカルアプローチということを何年も提唱されてきたことはご存じの方も多いと思います。手前味噌になりますけれども、私もＡＡ研の共同研究課題の中で、「ものの人類学」、近年では「わざ・身体性の人類学」という共同研究のプロジェクトを実施させていただきました。その中でも、こうした問題意識を共有してきました。それから、これは数年前に既に終了したプロジェクトですけれども、本日もご参加いただいている中央大学の山口真美先生を中心として大型科研（科研新学術）で「顔身体学の構築」というプロジェクトを、ここ五年にわたって実施してまいりました。こうしたさまざまなプロジェクトの中で、今申し上げたような問題意識を一定程度共有できたのではないかと考えています。今回のプロジェクトでは、これまでのプロジェクトを継承しながら、それをさらに発展・展開していきます。今回は一般公開のものとしては記念すべき第一回のシンポジウムになります。こうしたシンポジウムや各種の研究会等を通じて知見を共有する、あるいはディスカッションを通じて批判的に展開・発展させていきたいと考えています。

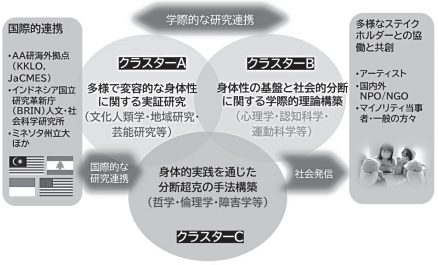
＃7

今回のプロジェクトは、先ほど来、何回か申し上げているように、学際的な共同研究であるということを大きな特徴としています。時間の関係であまり詳しい組織編成の話などはいたしませんが、大きく分けて三つのクラスター（クラスターA、B、C）から成る編成を取っています。クラスターとは研究者のグループということです。

＃8

かいつまんで少しだけ申し上げます。クラスターAは、主に文化人類学や地域研究、芸能

＃7



研究実施体制の概要

＃8

研究等の先生方に入っていただいています。アジアやアフリカのさまざまな身体実践や身体表現、芸能等を含むパフォーマンス等に関するフィールドワークに基づいた研究です。

#9

クラスターBは、先ほどの山口先生を中心に、主に分野としては心理学、認知科学、運動科学の先生方に、心理学もしくは認知科学といった観点からの差別や分断に関する身体性、身体的な基盤と、差別を克服していくに当たってのさまざまな知見ということを研究していただきます。後ほど二人目の報告者である高橋先生から心理学的な観点からお話が詳しくあろうかと思います。

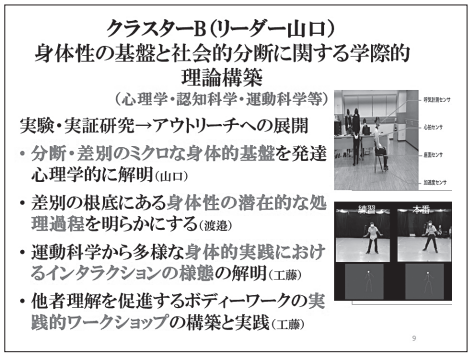
#10

最後のクラスターCは、分野としては主に哲学、倫理学、障害学の先生方にご参加いただいております。そうした哲学等の観点からの身体性の哲学的・理論的な基盤の研究、あるいは先ほども言及しましたが、小手川先生は近年、人種の現象学・ジェンダーの現象学というユニークな枠組みから、こうした問題、差別へのアプローチなどもされていますので、そうしたご研究をしていただく。クラスターCで哲学対話等を中心とするさまざまなアウトリーチ活動についても実施していただくことを考えています。

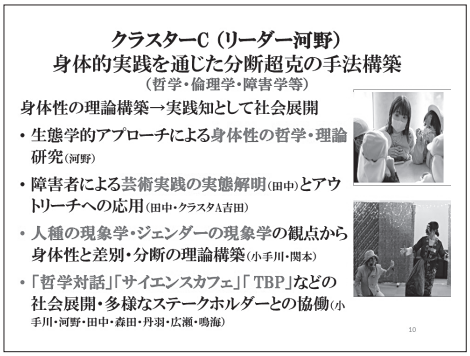
#11

時間の関係で、あまり個別のクラスターでどういう人がどういう研究をしているということを網羅的に述べることはできませんが、かいつまんで簡単に一つ、二つだけ、特に私の分野に近い人類学的な事例だけ紹介させていただきたいと思います。

#9



#10



一つは、身体的な実践を通じた民族的・宗教的な分断の越境ということです。具体的な例としては、共同研究の分担者であるＡＡ研の吉田ゆか子さんが取り組んでいらっしゃるテーマです。ご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、彼女は元々はインドネシア、バリ島の芸能についての研究をされていました。バリ島の芸能は、基本的にはバリ・ヒンドゥー（ヒンドゥー教）の教えに基づいた芸能ですが、吉田さんは最近、そのヒンドゥーを基本的にはベースとするバリ芸能に、ムスリム（イスラム教徒）のジャワ人が参加する。そのことを通じて、いわば芸能実践を通じて宗教的もしくは民族的な境界を乗り越えるという興味深い試みについてのフィールドワークをされています。これが一つの例です。

#12

もう一つは私の例です。私も東南アジア島嶼部、インドネシア、マレーシア、フィリピンなどが主なフィールドということになりますけども、現地で私は最近、幾つかいろいろなテーマで調査をしています。その調査テーマの一つとして、日本発のポピュラー文化、いわゆるカワイイ文化、オタク文化が現地のムスリムを含む若者層の間でどのように実践されているのかということについても研究しています。今見ていただいているスライドはマレーシアの例です。マレーシアという国は、基本的には非常に民族間境界が鮮明な社会なのですが、そのマレーシアにおいても、実はそうしたポピュラー文化のコミュニティ、ファンダムの中で民族的なバウンダリーを越えるような実践がされています。

#13

今度はジェンダーの領域でも、同じく東南アジアのコスプレイヤーのコミュニティのフィールドワークをしています。例えば男性のコスプレイヤーが女装する、もしくは女性の

#11

身体的実践を通じた民族的・宗教的分断の越境：インドネシアにおけるムスリム・ジャワ人のバリ芸能への参加・実践

バリ舞踊の衣装に長袖シャツとタイツを着用するムスリムの舞踊学習者（撮影：吉田ゆか子）

ジャカルタのヒンドゥ教寺院の周年祭にてガムランを演奏るムスリムとヒンドゥ教徒（撮影：吉田ゆか子）

11

#12

ポピュラー文化を通じた民族間境界の越境：マレーシアのコスプレ・ファンダム

・マレーシア：政党、学校、メディア（TV時間帯）等は民族（宗教、言語）別が基本：概して民族間境界が鮮明
・日本発ポピュラー文化（アニメ・コスプレ等）のファンダムは稀有な例外のひとつ

写真：いずれもムスリム・マレー人と非ムスリムの華人のコスプレイヤーのペア（撮影：床呂郁哉@クアラルンプール）

12

コスプレイヤーが男装するという、いわばジェンダー越境的な、もしくはジェンダー変容的な身体表現も盛んにされていることが分かってきて、それと社会的なコンテクスト、社会的なバウンダリーとの関係などについても調査をしています。

＃14

障害を巡るさまざまな状況も、今日の最初のご登壇者の広瀬先生から詳しいお話があると思いますけども、われわれの共同プロジェクト中でそうした障害を巡る問題も取り上げていきたいと考えています。今、見ていただいているのは、アジア・アフリカにおける障害者、障害を持つ当事者による身体表現、芸能や儀礼などです。そうした身体的な表現・実践を通じて、障害者の方と、いわゆる「健常者」、マジョリティの方がいかに共存の試みをしているか、そこにおける課題は何かといったことについても研究をしていただきます。左側の写真は、先ほどの吉田さんが研究されているバリ島の障害者のグループによる演劇です。右側はＡＡ研の今回のプロジェクトの分担者である村津さんが研究されるベナンにおける儀礼の場面です。こうした儀礼の中でも障害者の方が重要な役割を演じているという事例です。

＃15

こうした研究の成果を、われわれのプロジェクトでは積極的に社会に還元・発信していくことも考えています。今回のシンポジウムはその試みの一つです。ただ、今回のシンポジウムはどちらかというとフォーマット自体としては割とオーソドックスな普通のアカデミックなシンポジウムに比較的近い形かと思いますけれども、それ以外にも、われわれのプロジェクトではさまざまな実験的なワークショップ等を通じた成果発信もいろいろしていきたいと考えています。文化越境的身体実践（Transcultural Bodily Practice：TBP）ワークショップ

＃13

ポピュラー文化を通じた身体表現の多様性の実現
東南アジア（マレーシア、フィリピン等）における日本発のオタク／カワイイ文化等の領域におけるジェンダー越境／ジェンダー変容的な身体表現：異性装（クロスドレス）

左：男装したフィリピンの女性コスプレイヤー　右：女装したマレーシアのコスプレイヤー
（撮影：床呂郁哉）

＃14

アジア・アフリカにおける障害者（当事者）による身体的表現・芸能／儀礼を通じた障害者との共存

左：バリ島の肢体障碍者のグループによる道化劇（撮影：吉田ゆか子）
右：西アフリカ、ベナン共和国におけるヴォドゥン（霊的存在）信仰の儀礼。
この儀礼では障害者が重要な役割を演じることがある（撮影：村津蘭）

と仮に呼んでいますけれども、雑ぱくに言うと、芸能やダンス、演劇といった身体的なパフォーマンスやボディワークを軸とした実践のワークショップです。そういうことを通じて、障害者や文化的他者、いわゆる「マイノリティ」を含む他者の身体性を経験していくことで、他者と共振／同調する、もしくは場合によっては疑似的に他者に成る／変身するというような経験、他者の身体的な経験や感覚をいわば身をもって体験するワークショップも実施していきたいと思います。実は既に昨年十二月には試験的な試みとして、吉田さんを中心にバリの仮面劇を一般の方と一緒に体験するワークショップや、村津さんも映像人類学的な観点からの参加型の身体的な実践を含むワークショップを実施したりしています。

以上がプロジェクト全体の説明でした。

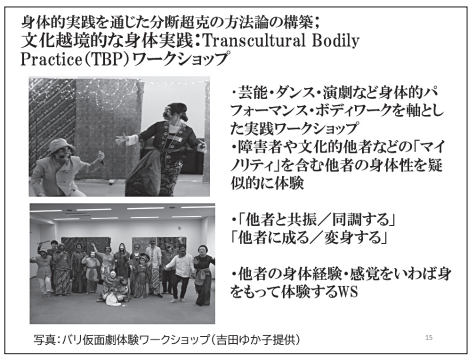
#16

本日は今回のプロジェクトのお披露目的な最初のシンポジウムということですが、主に三人の専門家、研究者の方にご発表していただきます。国立民族学博物館の広瀬先生、立命館大学の高橋先生、北海道大学のケイトリン・コーカー先生です。休憩を挟みまして、先ほども言及させていただいた國學院大學の哲学の小手川先生からは哲学の視点からのコメント、東京外大の大石先生には、人類学もしくは成果研究という視点からのコメントが頂けるのではないかと思います。最後に質疑応答と総合討議を行い、その後に情報交換会と呼んでいますけれども、平たく言うと懇親会を予定しております。今日は夜まで長丁場になってしまうかとは思いますが、どうぞ最後までお付き合いいただければと思います。

#17

最後に、お話の前に一個だけ事務的なテクニカルなお願い事項をさせていただければと思

#15



います。今回のシンポジウムの内容は、後ほど録音した内容を文字起こしして冊子化することを予定しております。その関係で、事務局の方でシンポジウムの内容に関して録音・録画・撮影等をさせていただいておりますので、あらかじめご了承いただければと思います。逆に、申し訳ないのですが事務局以外の方による録音・録画・撮影、特にその内容を事務局に許可なく無断転載やホームページにアップすることはご遠慮いただければと思います。よろしくお願いします。

質疑応答に関しましては、プログラムの最後の時間にまとめて実施させていただければと思います。その際に、登壇者以外のフロアの方からご自由にご発言、ご質問、コメントいただいてもちろん結構なのですが、その際に一点だけ。発言される方のお近くまでスタッフが参ります。著作権の許諾証をこちらの方で用意させていただいているのですが、そこにご署名いただければと思います。これは先ほど申し上げた冊子化して出版する関係で必要な手続きになりますので、お手数をおかけして大変申し訳ありませんが、よろしくお願いいたします。

#18

以上、大変駆け足で雑ぱくで申し訳ありませんでしたが、以上で趣旨説明とさせていただければと思います。ご清聴ありがとうございました。

続きまして、早速、プログラムに従いまして最初のご登壇者、国立民族学博物館の広瀬浩二郎先生のお話に移りたいと思います。ご準備されている間に、一言だけ広瀬先生のご紹介をさせていただければと思います。

広瀬浩二郎先生は国立民族学博物館教授ということで、ディシプリンとしては文化人類学、フォークロア、そして宗教史に関するご研究もされています。後ほど詳しくお話しいた

だけるかと思いますが、広瀬先生ご自身も若いときに失明されて、視覚に障害を持つというご経験をお持ちです。近年、障害者研究の領域で当事者研究というキーワードを耳にすることも多いですけれども、ある種の当事者研究的な視点からお話しいただきます。それから、広瀬先生の講演の内容の中でいろいろ触れていただけるかと思いますが、視覚以外の感覚、特に触角に関するご研究にも非常に重点的に取り組んでいらっしゃいます。今回はその点にも触れていただけるのでないかと思います。タイトルとしては、「ユニバーサル・ミュージアムとは何か—触察鑑賞の文化史的意義をめぐって」ということです。広瀬先生、ご準備がよければお話しいただいてよろしいでしょうか。お願いします。

Ⅱ　報告

「ユニバーサル・ミュージアムとは何か
―触察鑑賞の文化史的意義をめぐって」

広瀬　浩二郎（国立民族学博物館）

皆さま、こんにちは、広瀬です。よろしくお願いします。記念すべきシンポジウムとおっしゃっていましたが、しかもその最初で、若干緊張しております。床呂先生が趣旨説明ということでアカデミックな部分を含めてお話しされましたが、多分、僕の役割は、場を和やかにして、後半のディスカッションを盛り上げていく、そうした雰囲気づくりかと思います。気楽にしゃべらせてもらいますので、皆さんも気楽に聞いていただければと思います。

僕はコロナ禍の状況下、オンラインになって、自分でもパワポを使ったりすることがあったのですが、コロナが明けてこうやって対面でしゃべるようになって、元々小心者ですので、自分が見えないくせに「こちらをご覧ください」と言うのは何か気が引けて、昔のやり方に戻して、今日も全くスライドは使わずに、レジュメを作ってきて箇条書きにしておりますので、それを何となく眺めながら聞いていただければと思います。また、せっかく話を聞いていただくということで、レジュメは横書きにしたもの一枚ですが、その後に新聞記事を三つほどコピーしてもらいました。東京にけんかを売るわけではないですけれども、せっかく関西から来たので関西がいいだろうということで、神戸新聞と京都新聞の記事を持ってまいりました。これは参考資料で、ご関心があれば後で読んでいただければという程度のものです。

基本的にはレジュメオンリーで行きます。

今日は身体性、分断がテーマになっておりますけれども、そういうことを考えるときに、最初の三つのキーワード、「隔たり・つながり・関わり」を挙げています。分断や身体性を考えるときに、この三つがキーワードになるのではないかと思っています。順番にお話をしていこうと思います。

一番の「隔たり」からお話をします。今日はユニバーサル・ミュージアムということで、自分がずっと取り組んでいるテーマ、大げさに言うとライフワークと言ってもいいと思うのですが、そういうことについてお話をします。そもそも今紹介していただきましたように、大昔になりますが、元々僕は日本の歴史、宗教の研究から出発しています。一九九〇年代にフィールドワークを始めたのですが、そのときはまだ琵琶法師、それから、これは難しい字ですけれども瞽女（ごぜ）と読みます。盲目の女性の旅芸人です。漢字を見ていただければ分かるように、室町時代までは鼓を叩いて歌を歌ったのですが、江戸時代以降は三味線を抱えて全国を旅して芸を披露しました。こういう人たちが、まだ一九九〇年代には残っておりました。その聞き取り調査をするところから研究を始めました。まさに一九九〇年代から二十一世紀に入っていく過程で、最後の琵琶法師や最後の瞽女といわれている人たちがどんどん亡くなっていき、今では、いわゆる盲人芸能、琵琶法師や瞽女が語り伝えてきた芸能は日本の社会から消滅し、後継者がいなくなっています。

僕はそういう現場に立ち会いながら、論文を書いたりするときは、例えばラジオやテレビの普及により、こういう芸能者のいわゆる門付芸というものの必要性がなくなっていった、戦後教育の新展開で盲学校教育などが充実する中で、後継者がそもそもいなくなったというようなことを書いてきたわけです。それはそれとして、でも、どうももっと違うことがあるのではないかということを最近考えるわけです。それを言葉にしてしまうと非常に安っぽい

のですが、「見えないものをみる」と書いています。これはどういうことかというと、芸能者、特に平家物語などを考えてもらうと分かりやすいのですが、平家が滅亡して五十年、百年経ってから琵琶法師が平家の栄枯盛衰の歴史を語るわけですが、今の時代のような写真や動画がない時代に、琵琶法師が出す音と声で歴史を伝える役割を果たしていました。大切なのは、彼らの語りを聞く聴衆は、自分は直接見たことがない物語の場面を、音と声を聞くことによって自分で想像して広げていたということです。

とても乱暴な言い方ですけれども、近代以降の時代になって、特に二十一世紀になって、パソコン、スマホが汎用化していく中で、言ってみれば見たくなくても見えてしまう、見ようとしなくても見えてしまうという時代になったときに、見えないもの、自分が見たことがないものをイメージするという必要性がなくなっているわけです。そういう近代化、視覚優位の時代になっていくというトレンドの中で、琵琶法師や瞽女が消滅していった歴史を大きく捉えていかないといけないのではないかということを考えています。レジュメには「ユニバーサルの真意」と書きました。ユニバーサル・ミュージアム、誰もが楽しめる博物館とずっと言ってきたのですが、このユニバーサルという意味をもう少し深く考えるためには、実は自分が元々やっていた琵琶法師や瞽女の芸能が関わっているのではないかということを最近考えています。

関わっているのではないかというときのキーワードが、二のところに書いてある「触角」です。これは誤字ではなくて、あえて「角」という字の「触角」を用いています。目の見えない琵琶法師や瞽女が全国を旅していたとよく言われますが、やはり当然、見えない人が、しかも舗装されていない道、今のようにバリアフリー的な設備もない状況で旅をしていたのは、ある意味、非常に不思議です。その旅を可能としていたのが、する・されるという相互扶助的な関係もあると思うのですが、もう一つ、より大事なのは触角という考え方です。彼

ら彼女たちは、目が見えない、視覚的な情報が得られないのだけども、全身の触角センサー、聴覚・触覚も含めて全身のセンサーを働かせて外界の状況を把握している。そういう力を持っています。

実はこれは琵琶法師や瞽女だけの話ではなくて、単純に考えてみると江戸時代以前、夜になれば真っ暗になるわけです。そういう中で、われわれのご先祖様は夜になったらおとなしくしていたかというと、そうではなくて夜遊びに行く。そのときは月明かりが頼りだったりするわけですけど、月明かりがないところも足裏の感覚やら、臭いをかいだり、音を聞いたりして危険を回避しながら歩くということをしていました。家で夜なべ仕事をするときは、もちろん今のようなＬＥＤ照明がないわけですから、行燈の灯りがあったとしても今よりはるかに薄暗い中、いろいろな仕事をするわけです。そのときに、ごく自然に唇と舌を使って針に糸を通すなど、そういうことをしていました。

実はそうやって全身の触角センサーを使っていたのですが、それが近代という時代になって視覚に頼るようになることによって、だんだん全身に分布しているはずのアンテナ、センサーの使い方、配分がおかしくなりました。触角センサーの一つである視覚に過度に依存するようになったのではないかと考えます。そう考えたときに、ユニバーサルというのは、実は人間が本来持っている触角センサー、アンテナを本来の形に戻す。そういう大きな意味があるのがユニバーサルではないかと考えています。僕自身は琵琶法師や瞽女ではないですが、自分が視力を失って、盲学校に通って六年間勉強する中で、身をもって体育や美術の授業を通して自分自身の触角センサーに気づいていくという体験をしました。

もう一つここでお伝えしたいのは、インクルーシブ教育の話です。昨今、インクルーシブということがいろいろなところでいわれますし、ご存じのように日本のインクルーシブ教育は後れているからもっと推進しなさいという国連の勧告も出て、今、日本の各方面でインク

ルーシブということが求められています。大きな流れとして、障害のある子どもたちが地域の学校に通うという動きは世界的にも進んでいくわけですけども、でも本当にインクルーシブ一辺倒でいいのだろうかということを考えるわけです。インクルーシブということがいわれて、ＳＤＧｓのスローガンでもありますが、「誰一人取り残さない社会」ということが宣揚されます。この「誰一人取り残さない」というのは、もちろん良い意味で使われる言葉ですが、僕はずっとこの言葉に違和感がありました。少しひねくれているのかもしれないですけれども、取り残さないと言うときに、誰が誰を取り残すのだろうということをどうしても考えてしまうのです。

そうすると、何かそこに弱者と強者、取り残す側と取り残される側、もっと言うと、取り残す側が健常者、マジョリティであり、取り残される側が障害者、マイノリティという図式が見え隠れしているような気がします。インクルードというのは包摂、包含するということですけれども、そこに強者の論理が内包されているような気がして、この流れに少し注意が必要ではないか。繰り返しになりますけれども、もちろんインクルーシブの流れは止められないし、それは基本的にはいいことかもしれないけれど、そうなったときにマイノリティの人たちの触角というものをどのように確保して、その個性を伸ばしていくことができるのでしょうか。

一番の「隔たり」、隔たっているということは普通に考えると良くなくて、なるべくくっついて分断は避けましょうというのが当たり前です。でも、歴史的に考えたときに、琵琶法師や瞽女の芸能は、やはり隔たっていることによって成立、発展してきた部分があります。僕自身が体験してきた盲学校教育も、一定期間ですが学校を分けることによってマイノリティの特性を伸ばすという側面があります。単純に隔たりをなくすという発想ではなくて、時には隔たりを大切にしていくという発想も必要なのではないかと思います。

さて、少し急ぎながら二番の「つながり」に入っていきます。隔たっていることに意味があるとはいっても、永遠に隔たっていてはまさに分断になってしまいますので、隔たっているところからお互いに歩み寄ってどうつながっていくかという話になります。ここでは少しユニバーサル・ミュージアム展のチラシの話をしようと思うのですが、今日ここにユニバーサル・ミュージアム展のチラシを持ってきています。残念ながらこれは昨年十二月で終わってしまった、滋賀でやった展示のチラシです。民博で二十一年の秋にやった展覧会が、現在、各地を巡回しています。今年は夏に北九州に行きます。このチラシを回覧していただけますか。これはコピーができないということで実物を回していますけれども、お分かりのようにブツブツが入っています。点字、それから上の方のロゴ的なところはいろいろな手触りを感じてもらうというもので、これをわれわれは触図といいますが、そういうものが印刷されています。これは別に視覚障害者用に作っているものではなくて、ユニバーサル・ミュージアム展のチラシは基本的にこういう形のものを作っています。滋賀で二万枚ぐらい作りました。結構高いので、費用対効果を考えると微妙ではありますが、こういうチラシを作ってあちこちに配布しています。

これは言うまでもなく点字ですから、目の見えない人たちに情報を伝えるということも当然意識しているわけですが、それと同じように実はつながりという意味で、目が見えている、普段目で見る文字を使っている人たちに、「そうか、自分たちは普段、目で見る文字を使っているけれど、世の中には触る文字というのがある」ということに気づいてもらう。さらに言うと、上のロゴ的な部分にいろいろな手触りを印刷していますが、これによって触角センサーを呼び覚ます。そういう働きをしてほしいのです。繰り返しになりますが、実はどうしてもチラシに点字を入れると「これは視覚障害者用ですね」という捉えられ方をされるのですが、そうではなくて、このチラシはまさに見える・見えないをつなぐコミュニケーショ

ンの一つのきっかけづくりをするという役割を果たしています。ちなみに余談ですけれども、最近友人に教えてもらったのですが、「このチラシがメルカリで売っているぞ」と。一枚五百円、二枚八百円という値段が付いているそうですが、どうやら少し珍しいチラシとして価値があるようです。

レジュメに「コミュニケーション」という言葉を書きました。これは聾文化の中でもよくいわれることですが、障害ということは、〇〇ができないというよりも、生きていく上で使っているツールが違うということです。例えば、目で見る文字と手で触る文字があります。それは別に優劣がある話ではなくて、単に使っている人数が多い・少ないの差があるだけで、文字としての価値は同じです。同様に今日はここに触る時計を持っておりますけれども、時計も、見る時計があれば触る時計もある。先ほど申し上げたように、マジョリティの人たちは全身に分布する触角センサーのうち、視覚というものに特に近代以降、過度に依存するわけですけれども、一方、目の見えないマイノリティの人たちは、視覚を使わない代わりに他のセンサーを使っている。そのように考えるのがいいのではないかと思っています。

今日は本当は身体の話なので、武道の話をしたいのですけれども、これをやり始めると横道にどんどんそれていくので、今は飛ばして、またディスカッションのときにチャンスがあればお話をしたいと思います。

触角センサーをどのように鍛えるか、磨くかという話なのですが、ここからはユニバーサル・ミュージアムで触る展示をするわけですけれども、触る展示というのも、単に見えない人が触って楽しむということではなくて、むしろマジョリティの側、普段視覚を使っている人たちに、「視覚もいいけど、他の感覚も使ってみようよ」ということを呼びかけるのが触る展示の意味です。

具体的に言うと、触るということをいろいろな言い方で説明してきましたが、最近、僕が

割と説明で用いているのは、「入る・流れる・求める」という三要素です。少し説明してみようと思います。ここに椅子があります。「見る」と「触る」の最大の違いは、距離です。見る場合は、遠くに離れていても、あそこに椅子がある、どれぐらいの大きさで、どういう形のものだということが分かるわけですが、触る場合は、当たり前ですけれども歩み寄って距離をなくさないといけません。この辺で触ろうと思っても届かないのです。近づいていって触るわけです。距離があるか距離がないかというのが一番大きな違いだと思います。

まず、触る大きな特徴として、「入る」という話をします。距離があるのではなくて、そのもののそばに行って「こんにちは」という感じで入っていく。皆さんに立ち上がってもらうのは申し訳ないので、机にじっと手を置いてもらったらいいと思うのですが、多分、机を触ると一瞬冷たい感じがすると思います。しかし、五秒十秒、じっと手を置いていると、当たり前ですがだんだん体温が伝わって、机が温かく感じられます。さらに言うと、何か机と自分がつながっていく。どこまでが自分で、どこからが机かという境目がだんだんあいまいになってくる。あまり机とつながりたい人はいないかもしれないですけれども、例えば美術作品などを触るときは、やはりそういう物とつながる。美術作品が自分の中に入ってくる、自分が美術作品の中に入っていく。こういう感覚は、分断している状態では感じにくい感覚だと思います。まず、「入る」というのが第一段です。

次の「流れる」も、ごく単純な話なのですが、見る場合というのは、パッと見て全体が一目瞭然で見えるという便利さがあります。情報を、より早く、より多く伝えられるので近代という時代に視覚がクローズアップされていくわけですが、触る場合は置いた手のひらの接している面でしか情報が入ってこないのです。その手のひらの情報を、自分が手を動かして、体を動かして広げていく、線にして、面にして、立体にしてというように広げていくという触り方をします。ここも大きな違いです。動かなくても情報が入る視覚に対して、自分で体

を動かして情報を広げていく、増やしていくという触り方をします。最近はもうおじさんですから流れるように体が動くなどということはないのですが、気持ちだけはスーッと、手と共に体が流れるように動く。

大切なのは、体が流れるように動く、水のように流れるのと同時に、時の流れということです。見る場合は瞬時にパッと情報が入って、「あ、分かった」。それで終わるわけですけれども、触る場合は物理的に時間がかかります。今の忙しい時代に時間がかかるというのはマイナスに受け取られることが多いのですが、実は身体に刻み込まれる記憶ということで考えると、時間をかけるからこそ体に刻みつけられる、記憶に残るという体験があります。時の流れと共に、水の流れのように体を動かして情報を増やしていくというのが大きな特徴になります。

最後の三番目は「求める」。これは先ほどの琵琶法師たちの芸能のところでも触れましたが、美術作品を触るときに、最初は触ったときの温度や素材感があります。それは見るだけでは分からない。これがファーストステップです。その先にあるのは、見えないものをどれだけ感じることができるのか。具体的に言うと、作者に自分たちは会ったことがないのだけれども、実際にその物を触ると、物の背後にいる作者、人を感じることができる。なぜならば、多くの美術作品は人が手で作っているものです。実はそれを触るというのは、単なる鑑賞というよりも制作を追体験しているということになります。自分は実際その作者に会ったことがないのだけれども、触って、作者の思いや作品のエネルギーを感じる、目に見えないものが伝わってくるということがあります。

この話をするときに、よく縄文土器の話をするのですが、土器を触ると、自分たちは縄文人に会ったことはない、でも触った瞬間に縄文人の手というものを感じる、何千年かを経て縄文人と自分が握手をしているような感覚にとらわれる。触る先、物の先にいかに人を感じ

ることができるのかということが大きなポイントになります。その見えないものを真剣にみてやろうという、ある種の求道心ということで「求める」という字を使いました。

この三つを少し意識して、ユニバーサル・ミュージアム展で触るということを考えると、見る代わりに触っているのだということではなくて、もう少し深い部分なのではないかという気がします。

限られた時間でこれをやるとあまりよろしくないのですが、せっかくなので。最近、触察体操というものを考えたのです。「入る・流れる・求める」という話をして、「じゃあ、皆さん触ってください」と言っても、子どもは割と盛り上がってワーッと触るのですが、大人は「でも、見たら分かるし、いいよ」みたいな感じで、なかなか触ってくれないのです。そういうところで、少しリラックスしてもらうために触察体操というものを考えました。それは単純な動きで、この後、コーカーさんがダンスの話をされるので、少しまねごとをしますけれども、ニューと入って、リューと流れて、キューと求める。この単純な動きを三回ぐらいやると、割と場がほぐれて、参加者が触ってくれるようになるので、意外と自分では気に入ってやっています。後で休み時間に皆さんやってみてください。

最後の三番のところを少し駆け足でお話しします。重要なタームとして二つ、“Nothing about us without us”と「この子らから世に光を」という言葉を挙げています。

まず、“Nothing about us without us”です。これは皆さんご存じのように、障害者権利条約ができていくときにスローガンになった言葉です。まさに今日のテーマとも重なりますが、アイヌや女性など社会的弱者に関する問題も同じですけれども、マイノリティに対する政策や法律を決めていくときに、実は従来はマジョリティの側が主導して決めていました。障害者のことで言うと、障害に関する法律、政策を考えるときに非障害者の健常者たちが主体となって法律などを決めてきたという長い歴史があります。でも、そうではなくて、障害

に関することを決めるのであれば当事者の意見を聞こうという大きな流れが出てきました。このスローガンが、“Nothing about us without us（私たちのことを私たち抜きで決めない）”というものです。

これは日本にも入ってきて、今、日本の障害者政策の中の委員会では、当事者がかなり重要な役割を果たすようになっています。それは社会の成熟として評価できることであり、素晴らしいことなのですが、少し意地悪な言い方をすると、“about us without us”の“us（私たち）”というのがどうにも気になります。僕はあえて重要性と危険性と書きました。重要性というのは言うまでもないことですが、危険性というのが大切です。この“about us without us”を突き詰めていくと、もしかすると「私たちのことは私たちにしか分からないのだから、あなたたちは口を出さないでください」、そういう教条主義に僕たちが陥ってしまう危険性があるのではないかと思います。だから、大切なのは、“us（私たち）”を閉じたものにするのではなくて、どれだけ開いていけるのかということです。そういうことを考えないといけないと思います。そうしないと逆差別を惹起しかねないと思います。

この話をするときによく僕が例に出すのは、海外の日本研究者です。有名どころでいうとドナルド・キーンさんやロバート・キャンベルさんがおられますけども、そういう海外の優れた日本研究者に対して、われわれ日本人は「いや、日本のことは日本人にしか分からないのだから、外国の人は口を出さないでください」という傲慢なことは言わないですよね。むしろ、キーンさんやキャンベルさんの論文や著作を通じて、われわれが触発される、「ああ、そういう見方もあるのだ」と刺激を受けるということがたくさんあるわけです。同じように障害について考えるときも、当事者を尊重するというのは大前提ですが、一方で、非当事者の人たちも、私たちの自分事なのだと考えてもらわないと、なかなか広がりや普遍性が出てこないと思います。

もう一つの大切な言葉は、「この子らから世に光を」です。これはご存じの方も多いと思うのですが、糸賀一雄先生という戦後日本の障害者福祉の先達で、重度の心身障害、知的障害の子どもたちの施設をつくった方がおられます。実は今、回覧してもらっているユニバーサル・ミュージアム展を滋賀で昨年秋に開催したのですが、滋賀で開催が決まったときに僕が一番意識したのは糸賀先生の業績です。糸賀先生の有名な言葉に「この子らを世の光に」というものがあります。これは今でも非常に意味のある力強いメッセージがこもっている言葉ですが、従来の福祉は、「この子らに世の光を」と考えていました。つまり、今までは世間で顧みられることがなかった、忘れられていた知的障害の子どもたちに世の光を与えていこうという発想です。その「この子らに世の光を」と言っていたものを、糸賀先生はそうではなくて、「この子らを世の光に」しないといけないと言ったのです。これはいわばコペルニクス的な転回ですし、障害児を主体として考えるということで意味があるわけです。ただ、糸賀先生が亡くなってもう五十年以上経つ今、ユニバーサル・ミュージアムという展覧会を滋賀で行うことになったときに、糸賀先生への敬意を持つと同時に、やはりそこで留まるのではなくて、もう一歩先に行かないといけないと考えました。「この子らを世の光に」と言っているときには、まだそこに光にする側とされる側、具体的に言えば施設職員と入所者の二分法が残っているのではないかと、僭越ながら思いました。その二分法を乗り越えていくために、あえて「この子らから世に光を」ということを申し上げました。

これはどういうことかというと、決定的に違うのは「この子ら」の意味です。糸賀先生が言っていた「この子らを世の光に」と言うときの「この子ら」は、言うまでもなく障害当事者の人たちです。そういう人たちを世の光にしていくのだ、光にするのは施設職員、健常者の側です。僕が「この子らから」と言うときの「この子ら」は、全く意味が違います。滋賀で開催されたユニバーサル・ミュージアム展を訪れる来場者、運営側、企画者など、全ての

関係者、そこに関わっている人全てを「この子ら」と言いました。ユニバーサル・ミュージアム展に集う全ての関係者から、世に新しい光を届けていこうという発想で、二分法を乗り越えようとしました。これは文化人類学では古くて新しいテーマですが、調査する側とされる側の関係など、そういうことをずっと意識して探求してきた人類学から導き出される多様な視座があると思います。それを今回は「from」、一つになってそこから新しいものを発信していくということを訴えました。

最後に触常者の話がありますけれども、冒頭に申し上げたように、触角センサーは本来人間が皆持っていたもので、それを取り戻していく、呼び覚ましていく。そういう場としてユニバーサル・ミュージアムの展覧会があって、そこが巡回展で積み重ねられていくことによって、すごく大きな話ですが、近代というものが前提としてきた、見える・見えない、できる・できない、闇・光といった二項対立を乗り越えていこう。そういう大きなテーマを掲げて、今、小さな巡回を繰り返しています。巡回展を岡山、滋賀でやって、今年は北九州でやります。東京を嫌っているわけではないのですが、なぜか西の方しか呼んでくれないのです。何とか東の方でやりたいと思っておりますので、このプロジェクトとも連携しつつ、「AA研から世に光を」ということで、少し超過しましたが、これで終わらせていただきます。

〔床呂〕 広瀬先生、いろいろと啓発的な、触発される大変いいお話をありがとうございました。身体を通じた一方で、分断、隔たり、それから身体、あるいは触ることを通じた隔たりの克服、つながっていくことへの展開など、まさに今回のシンポジウムに大変ふさわしいお話だったかと思います。時間が三十分と本当に短くて申し訳なかったという思いでいっぱいです。まだまだ一時間でも二時間でも続きを聞きたいというのが個人的にも本音なのですが、一応プログラム上、一旦区切らせていただきます。また後ほど質疑応答、ディスカッ

ションの時間に、十分にお話いただけなかった論点等についても触れていただければと思います。他の皆さまもご質問、コメント等、多々あろうかとは思いますが、最初の趣旨説明のときに申し上げましたように、コメントやご質問はシンポジウム後半の質疑応答の時間帯にまとめてさせていただきます。ご了承ください。

プログラムに従いまして、ここで休憩時間です。プログラムでは3時なのですが、時間が若干オーバーしておりますので、三時五分に再開ということでよろしいですか。十分弱です。三時五分までにこちらの会場にお戻りください。三時五分からプログラムの続きをしたいと思います。よろしくお願いします。

一つ事務的なご案内です。受付のところで既にご案内があったかもしれませんが、先ほどの趣旨説明で言及させていただいた今回のプロジェクトの前身となる過去の幾つかの顔・身体学や同じようなシンポジウムを冊子化したものがあります。早い者勝ちですので、どうぞご自由に、サンプルの範囲内でお待ちください。よろしくお願いします。

――休憩――

（床呂）　時間となりましたので、プログラムに従いましてシンポジウムを再開させていただければと思います。次のご登壇者は立命館大学の高橋康介先生ですが、高橋先生について一言だけ簡単にご紹介させていただければと思います。趣旨説明のときにも申し上げしたように、今回われわれのプロジェクトは学際的な共同研究ということで、いろいろな分野の先生方にご参加いただいておりますが、高橋先生は分野としては心理学、認知科学です。今日、先生ご自身のお話の中で詳しく自己紹介もあるかと思いますけれども、元々は実験心理学ということで、実験室の環境の中での顔や身体認知の研究から出発されました。しかし、それ

だけでは駄目だということで、より人類学的なフィールドワーク研究とのある種の学際研究的な「フィールド実験」という仕組み、具体的にはアフリカやアジアで、実は私も、本当に簡単なパイロット実験的なものでしたが、東南アジアで高橋先生のチームと一緒に実験などにも参加させていただいたことがあります。非常にユニークな学際的な研究のところで、そうした手法を通じて顔や身体の問題にアプローチをされている研究者であられます。詳しくはまた高橋先生ご自身のご発表の中であろうかと思います。

高橋先生、ご準備がよろしければご発表をお願いできればと思います。タイトルは「心理学の視点から顔身体の概念を再考する」です。三十分程度でよろしくお願いいたします。

「心理学の視点から顔身体の概念を再考する」

高橋　康介（立命館大学）

＃1

ご紹介いただきありがとうございます。立命大学総合心理学部から来た高橋といいます。顔・身体のときからお付き合いさせていただいている方々も半分弱ぐらいいるでしょうか。ただ、初めて私がお話しさせていただく方もいるかと思いますので、少し知覚心理学の話と先ほどのフィールド実験の話を踏まえて、最近考えていることなどをお伝えできたらと思います。

＃2

最初に雑談というほどではないですが、私は広瀬先生のお話を伺って、西にあるということで、実は立命館大学総合心理学部というところは、こちらに太陽の塔があって、広瀬先生の民博があります。民博から二・五ｋｍぐらいに立命館大学があります。このちょうど中間ぐらいにある赤い丸、これが私の家です。つまり、広瀬先生はお分かりなると思いますが北春日丘というところに住んでおりまして、大変近いところになります。ですので、もちろん民博にも結構行ったりしています。

＃＃

これは、私は二〇二一年から大阪にいますが、そのときは世の中が本当にコロナ一色でなかなか行くところもなくて、ただ、民博はずっと開けていただいていて、常設展に行ったわ

けです。お分かりかもしれませんが、吉田ゆか子さんの展示があって、知らずに行ったのですが、そのとき顔・身体で吉田ゆか子さんとご一緒させていただいていました。これは私の二人の娘が楽器を叩いているところなのですが、吉田さんが映像で登場して、「こんなところに知り合いの研究者がいる」と思って非常に驚いた記憶が今、蘇ってきました。これは二〇二一年の八月です。私の記憶の中で、先ほどのユニバーサル・ミュージアムがあったような気がしたのです。ただ、先ほど調べたら二〇二一年九月からということだったので、恐らくプレイベントか何かをやっていたのではないかと思います。「触れますよ」みたいな展示が常設展とは別の場所、最後の横にあって、あのときは本当にコロナで全て「触るな」の時代だったのに、「触れます」という展示があったことが非常に印象的だったと、今、思い出しました。

#2

本題に戻りますと、私は専門は知覚心理学です。先ほど床呂さんから元々は実験心理学だったというように紹介されたのですが、今もアイデンティティとしては実験心理学をやっております。ただ、十年ほど前から、いろいろな方に助けていただきながらフィールドワークというところに足を踏み入れまして、そこで知覚や認知の多様性みたいなものを直接自ら味わうことがありました。さらに最近は、もう一回それを自分の中で考え、捉え直して、知覚心理学というものを、ある意味人類の普遍的な部分という建前でやっているわけですが、全ての人類はこうやって知覚しているといったところと、フィールドにおける多様性。これは、自分の中でこれをやっている意義みたいなことをだんだん考えつつあるという状況です。

#3

最初に、知覚心理学者として普段何をしているかというと、いろいろな実験などもやっているのですが、例えばこれはいわゆる錯視です。錯視というと見るだけなのですが、世の中には錯聴という、聴き方の変調みたいなものもあります。決して視覚だけではないのですが、今日お見せしているのは視覚的な錯視といわれるものです。例えば、これは私が開発した錯視なのですが、波線と折れ線です。ウニョウニョした波線とカクカクした折れ線が見えますが、実は全て波線で、折れ線は実在しません。また、右側はつい最近発表した錯視なのですが、黒白になっていると数が少なく、あるいはパターンが粗く見えて、同じようだと細かく見える。実はこれは形としては全て同じです。そういった極めて地味な錯視研究を普段やったりしています。

#4

なぜそういう私がここでお話しさせていただいているかといいますと、先ほど床呂先生からもお話がありましたが、二〇二一年ごろまで中央大学の山口先生をリーダーとする顔・身体学というところに関わらせていただきました。この中で、われわれの研究グループは顔認知の多様性など、普段の実験室的な研究ではなかなか明かせないようなことを、フィールドに出て実験をすることで解き明かしていく。これを今日は少しだけですがご紹介したいと思います。その中で、今日もいらっしゃっている大石先生など、皆さんといろいろとコラボレーションしながら、人類学と実験心理学の融合、仮説検証型の研究と仮説生成型の研究の融合ということを進めています。実験は基本的に、いつ・誰が・どこでやっても同じことになる。それこそ物理学の実験はそういったものが期待されると思います。一方で、フィールドで起こることの一回性みたいなものがあります。この矛盾をどうやって昇華させていくか

ということを考えながら、いろいろな活動をしています。例えば、二〇一九年に描画ワークショップを東京外大でさせていただくなど、そういったことを進めてきました。

#5

少し本題に入りたいのですが、顔・身体学からの話として、今回の身体性の分断の超克という話を少し考えていくと、現代社会は非常に顔偏重の社会であるという思いが私の中には最近、特に強くあります。例えば最近のzoomにおける顔だけのコミュニケーション。顔だけが前にずらっと並んでいるという、これを例えば十五～十六世紀の人たちがもし見たのであれば、「何なんだ、これは」と恐らく思ったでしょう。目の前で顔がずらっと並んで動いているような状況、あるいは、これも今インターネット上にたくさんあるわけですが、写真を撮って顔だけにモザイクをかけて、それをもってアイデンティティが隠され、不可視化されたとする。顔だけ隠せば自分ではなくなる、誰か分からないというようなことです。逆に言えば、もう身体だったらあらわになっているわけです。身体だったらあらわになっているのだけれども、顔だけ隠すことによって自己の自己性みたいなものが不可視化されるというような感覚。これは恐らく全然不可視化されていないような場面もあるとは思うのですが、そういった感覚です。あとは、一緒に顔身体学のプロジェクトでさせていただいている小手川先生からもいろいろ話があるかもしれませんが、ルッキズムや整形依存、醜形恐怖など、とにかく顔というものに対する偏重を非常に感じるところです。それはわれわれが普段の日常生活を送るだけではなかなか気づかないかもしれなくて、私自身、タンザニアに行って研究している中で、やはりそのコミュニケーションの中で使っているものがもしかして違うかもしれないというような感覚があり、こういったことに行き着きます。

#6

ここにいる先生方の前で、実験心理学者の私がこういうデータを出すのはどうかという気もするのですが、顔という言葉がどれくらい使われているかということを、今はインターネットによって結構簡単に調べることができます。N-gram のデータです。縦軸に頻度、横軸に時期を取ったものです。これはオックスフォードの辞書から引っ張ってきたものですが、一八〇〇～一九〇〇年代ぐらいに増えて、また減って、なぜか分からないですが、また最近増えつつあります。こちらは名詞だけの顔です。

#7

こちらは Google Books の方で見ることができるもので、これも顔という単語が使われたもののデータです。一七五〇年代ぐらいからずっと平坦になっているのですが、二〇〇〇年を超えたころから急に顔という言葉が書籍の中で使われている頻度が非常に増えているらしいということが分かりました。

#8

やはり世の中、周りを見ると、顔をどうする、顔を隠す、顔を変えるなど、そういったことが非常に強く意識されているのではないかと思います。これからの話は、主に顔に関することです。顔に関することを話すと、どうしてもそれは身体を浮き彫りにするのです。なぜわれわれは顔だけを取り出して議論できるのか、するのかというところに行くからです。顔身体の中の顔という話は、顔の話をすることによって身体の特殊性もまた浮き彫りにするみたいな意味もあります。

これも辞書的な定義として考えると、顔は恐らく大きく分けて二通りの理解の仕方があ

るのではないかと思います。一つは、事物的な顔です。まさに事物としての顔、“from the forehead to the chin, and containing the eyes, nose, and mouth、”顔の部分部分の集合体としての、物としての顔という意味です。もう一つは“The part of a thing presented to view”ということで、ある意味、私であったり、顔を持った存在のそのものが何たるかを表すような物として、つまり他者に見せる物としての記号的な意味です。その事物的な顔と記号的な顔が割と共在していて、でも、あまり区別されずにわれわれは普段考えている、使っているといったことがあるのではないかと思います。古代ラテン語に話を戻すと、顔というのは、物を作る、かたどるといったことから来ているらしいです。

#9

心理学における顔の話ですが、これは当然、今この時間だけで網羅することは全然できません。ただ、こういった研究がされているということを少しだけ紹介しておきます。

例えば、顔の知覚・認知のメカニズムです。人間はどうやって他者の顔を知覚して、認知しているのか。そこには、人物を同定する、表情を認識する、顔の全体を同時に処理する、逆さまになった顔は非常に処理しづらいといったものがあります。

あとは顔に関する感性認知です。例えば、魅力的な顔とはどういうものなのか。一般的に平均的な顔は魅力的である、シンメトリックな顔は魅力的であるといったことがいわれたりするわけです。

もう少し離れると、顔認知のアノーマリーということで、例えば相貌失認があります。これは、顔はもちろん見るのだけれど、それが誰なのかが分からない、人物同定ができないというものです。一方で、非常に大量の人の顔を、それが誰なのかを覚えておけるhyper recognizerの研究もあったりします。

脳に話を振ると、人間の中には顔を認識することに特化したといわれる脳の部位があったりするということです。

こういった研究がたくさん積み重ねられていきます。ただ、ここで言っている顔が事物なのか記号なのかというのはかなりあいまいで、そこには恐らくあまり触れられていません。例えば、顔の全体を一気に処理すると効率的であるというところで考えると、それは顔がもしかしたら事物として扱われるかもしれないのですが、人物同定、それは誰なのか、あるいは表情がどうか、その顔から得られる感情は何なのかというと、これはもう顔がある意味、記号化とされたものとして、内面をあらわにするものとしての顔と認識されています。心理学の方もいらっしゃるので異論はあるかもしれないのですが、心理学でこの辺りはあまりきちんと整理されずに、事物としての顔と記号としての顔、先ほどの辞書的定義で言うと一番上の話と二番目の話がかなり混在して使えているのではないかと私自身も思っております。

#10

この辺りの話について、『顔身体学ハンドブック』を顔・身体学の中で出版しました。心理学の話もたくさん出ていますので、もしよろしければ、少し高いのですが、こちらを参照していただければと思います。

#11

少し話を進めていくと、今みたいな顔の心理学は主に西洋の大学で行われたことです。最近、心理学ではWEIRD問題ということが叫ばれています。つまり、心理学で行われてきた数々の研究は、西洋の（Western）、教育レベルの高い（Educated）、産業化された（Industrialized）、裕福な（Rich）、民主的な（Democratic）人々を対象として行われてきま

した。これはJoseph Henrichが二〇一〇年に指摘したことですが、心理学分野では大きな反省として今いろいろ考え始めています。

#12

われわれ自身、これに対して何をやったか、何をやってきたかということなのですが、それであれば、やはりいろいろなフィールドに飛び出して、これまで心理学がやってきた顔認知をもう一回再考してみようということを、やらざるを得ないというか、やってみようということで、十年ぐらい活動を続けています。結局のところ、「顔を見る」という研究、顔認知の研究はたくさんあるけれども、これは東アジアを含みますが、ほとんど西洋社会のものであるということです。あまりにもわれわれは、顔の認識が自分自身の経験としてうまくできすぎているので、この認識の仕方が他者と違うかもしれない、自分が見えているものは他者と違うかもしれないとは思わないわけです。でも、それはもしかしたら非常にバイアスのかかった見方かもしれないということです。

#13

そういうことで、こちらにフィールドの場所が多少書いてありますが、例えばアメリカ、ヨーロッパ、日本、東南アジア、アフリカの中では東西のアフリカなどで、さまざまなフィールドワーカーの人たちとのコラボレーションとしてフィールド実験を進めてきたということになります。

#14

こちらは私自身が連れていってもらった東アフリカのタンザニアという国の内陸部の村の

様子です。ここでこれをどうこうお見せしてという話ではないのですが、こういったところで実験しています。人類学の場合は、恐らく入り込んでいろいろと生活を共にしながら行う参与観察的な手法などがあると思います。

#16

しかし私の場合は、例えばiPadのようなタブレットを現地に持っていって、その中の簡単なテレビゲームみたいなものをやってもらいます。それによって向こうの人たちが、いわゆる実験心理学で行われている実験課題に対してどういう反応をするのかということを調べるということをします。ある意味、比較文化心理学に近いですが、こういう感じで実験をしています。ただ、実験そのものは、例えば日本でやっていること、アメリカでやっていることと何ら変わらないわけですが、環境は多少違うのですけれども、こういった形でデータを取ってきました。

#17

データについては今日は詳細を説明することは省いて、結論のところを少しだけ述べたいと思います。

まず、絵文字の実験です。スマイリーみたいなニコちゃんマークといわれるものが、どう見えるか。これは割と出発点になった実験ですけれども、日本とカメルーン、タンザニアで行ってきました。少し注意事項的な話ですが、私はこれをデータで示していますが、例えば日本はこう、アフリカはこう、タンザニアはこう、カメルーンはこうと言ったとしても、それは、例えば日本の全ての人がこうである、タンザニアの全ての人はこうであると言いたいわけではなくて、たまたま訪れたタンザニアの内陸部の村のたまたまこの実験に参加してく

れた人たちがこのような結果を示したということを意味しているに過ぎません。ここでは多分大丈夫だと思うのですが、心理学者の前で話すときは、これはとても気を使っています。このデータで「アフリカ全体は」などと雑に捉えたいわけではなくて、むしろ、われわれが当たり前だと思っていること、少なくとも西洋社会では当たり前だと思っていることに、かなり疑いの余地があるということだけを示したいという意味です。具体的に言いますと、タンザニアやカメルーンで取られたデータにおいては、ニコッとしたスマイリーのマークが必ずしも笑顔と評価されるわけではない、見えるわけではないということです。

#18

あるいは、こちらは顔パレイドリアといいまして、目と口に当たるような部分、例えばコンセントの絵などを見ると、われわれはよく顔に見えると思うわけですが、そういったものの起こりやすさを調べたところ、日本の方がタンザニアやカメルーンよりも、顔に見えそうな物が顔に見える確率が高かったわけです。

#19–21

それから、顔の絵を描いてくださいということで、私から見て非常にシンプルな丸に目、目、口という点々と線だけがある顔で、これを笑顔にしてくださいという課題をやったのです。日本やフィンランドなどでやったところ、いわゆるスマイリーという記号的な顔が描かれるのに対して、タンザニアやカメルーンで描いてもらった中にはいろいろな描かれ方がありました。例えば、元々の絵には鼻はなかったのですが、鼻がかなり強調して描かれる、口の中に歯が描かれるなど、いろいろな特徴が見られました。別にこの一つ一つを見て、これがどうだ、これがああだということではなくて、われわれは非常にシンプルな丸に目、目、

口だけあって、「これを笑わせてください」と言われたら、恐らく多くの人は、日本あるいはフィンランドで描かれているような顔を想像すると思うのです。それは恐らく、われわれがこの西洋社会の中でずっと生まれ育って教育を受けてきたということの影響であって、それは環境が違えば違うかもしれないということを示したいわけです。

#22–24

こういった絵を描いてもらったという実験データがありまして、そもそも顔の認識の仕方が、人によってかなり違うかもしれないということです。西洋型の顔の図式化をして顔をシンプルにしたときは、われわれは目と目と口で、点、点、点で顔ですということをするわけです。非常に多くの場合、こういった目、目、口という図式化が使われます。現地のアシスタントをしてもらった人に、「なぜ目、目、口のスマイリーが顔に見えないのか」と聞くと、「いや、口がないではないか」と言われたわけです。私は最初に衝撃を受けて、目、目、口だと私が思っていた顔のパーツが、実は目、目、口ではなかった、少なくとも目、目、口に見えていなかった人がいたということです。それを事実として私は直接伺って、「そうなのか」と。つまり、われわれが顔を捉える先入観、バイアスはここまで強力だったのかということを、その場で自覚させられました。

そして最後にまた実験をしました。それは、目と目とお椀型の白い部分があり、「これが何に見えますか」という実験なのですが、日本ですると大半の人は口だと言います。狭さや場所を微妙に変えてあるのですが、目、目、口みたいなスマイリーを見て、「白いものは何に見えますか」と聞くと、日本では多くの人は「これは口だよね」と言うのですが、ケニアの人は、口という答えは非常に少なくて、顎であるとか、むしろそれ以外であると言います。だから、顔を図式化するときに、もう目、目、口という先入観がないわけです。そういう捉

え方が元々ない。だとすると、「この辺にあるのは首筋だよね、鎖骨の辺りだよね」と。当然そうなるわけです。こうやってデータとして突きつけられると、「なるほど、やはりそうだったのだな」ということを本当に実感するわけです。

#25

他にもインタビューなども少し行っていて、今言ったように目、目、口の顔表現というものが恐らく普遍的ではないということは、もう明らかだと思います。ただ、西洋型社会では本当に小さなころから、目、目、口というアニメのキャラクターなどが非常にたくさんいるので、われわれはあまりにもそれに慣れすぎてしまっていて、それだけで顔と簡単に思えてしまうのです。だから他の全ての人がそう見えていると思ってしまうのですが、そうでもないということです。

もう一つ、これはまだ仮説段階ですが、記号的な顔の概念が、もしかしたらそれすらもユニバーサルではないかもしれない。われわれは例えば顔偏重社会と言ったときに、それは当然、首から上の顔だけを思い浮かべて、「みんな顔を重視している」と思うでしょう。例えば、ここにスワヒリ語に詳しい人がいるかもしれないのですが、スワヒリ語の顔（uso）という単語は、どうも事物的な顔、まさにオックスフォードが言っている一個目の事物的な顔のみを示します。そこで、いわゆる記号的な顔を表現するような単語はないかということを向こうでお聞きしたのですが、どうもそれはなさそうだということでした。少なくともわれわれが言っているような記号的な意味での顔を上手く表現できるような言葉がなかった、今のところ見つかっていないということです。

身体から顔だけをポンと取り出して、「はい、顔がありますよね」という記号的な顔、これはもしかしたら全然ユニバーサルの話ではないのかもしれません。なぜわれわれは顔だけ

ポンと取り出して、それをああだこうだ議論できるのか。これはむしろ逆に不思議なわけです。これは大石さんから聞いた話で、もしかしたら後で大石さんからフォローがあるかもしれませんが、顔だけをポンと見せて実験をしていると、「これは生首ではないか」というのです。当然、リアルな社会の中で首から上だけあったら、それはとんでもない話なわけです。でもわれわれは、メディアの中でそれがあまりにも普通にあるので、何の違和感もなく「それは顔だよね」と、いわゆる記号的な顔として理解してしまいます。

#26

その背景として、このプロジェクト自体、ある意味コミュニケーションが一つの主題になってくると思うのですが、事物としての顔身体とコミュニケーションにおける顔は、かなり混同されているのではないか。それは身体性の研究の中でももちろんなそうなわけです。コミュニケーションをする際に、顔というものは、こちらで符号化して、向こうに渡して、向こうで複合化するという、符号化・複合化のプロセスを必ず挟みますから、コミュニケーションをするというのは何だかんだ顔を記号化せざるを得ない。でも、記号化の過程には恐らく知覚や認識は絶対に入っている、つまり顔を捉える枠組みを使ってわれわれは記号化するわけです。例えば、目、目、口として捉えるなどです。しかし、今のところ皆それを同じようにやっているという信念、つまり自分と同じものを同じように見ているという信念、過信があるのです。その先に、これは木村大治さんの言葉ですが、いろいろな「行為のもつれ」みたいなのがあるのではないかと思います。つまり、自分と他人が同じものを見ているからといって、同じように見ているわけではないのだということ、同じものを聞いているからといって、同じように聞いているわけではないのだということです。これをどれだけわれわれは自覚できるかという話を考えなくてはいけないのではないか、特にこのプロジェクトでは

考えなくてはいけないのではないかと思っています。

#27

最後に、私は知覚心理学が本職なので、その話をします。今の話は、それはそうだよねとなると思うのです。皆、考え方が違う、皆、やり方が違うとなると思うのですが、知覚心理学をやっていると、もっと端的に、見ているものが同じでも見えているものが違うという事例、あるいは聞いているものが同じでも聞こえているものが違うという事例がたくさんあるのです。このプロジェクトの最初のシンポジウムの出発点として、知覚心理学者からのメッセージを、デモンストレーションとして共有したいと思います。

こちらに今、白黒のぼわぼわとしたものがありますが、何かが見える方はいますか。恐らく多くの人が、何も見えない、何か意味のあるものがないということになると思うのですが、ひっくり返すと、この時点でどうでしょう、見える人がいるかもしれないし、まだいないかもしれません。「ここに目、目、鼻、口みたいなものがありますよね」と、少し教示するだけで、「確かに顔がありますよね」となるわけです。これをまたひっくり返すと、最初に出たものと全く同じものが出ているわけですが、恐らく皆さんにとって見えているものが最初とかなり違います。今、逆さまの顔が見えていると思います。

#28–29

また、見え方が変わるというだけではなくて、人によって見え方が違うのだということの端的な例がこちらです。これは写真でボーダーの服が出ていますが、どういう色に見えますか。グレーとピンクに近い色、あるいは青と白に近い色、どちらの組み合わせに見えますかということを少しお伺いしたいのですが、グレーとピンクに見えるという方。結構いますね。

むしろ青と白だという人。少しいますね。これは照明の具合などでどちらが多くなるかはまた変わるのですが、同じものを画像として見ているわけです。けれども、恐らく今グレーとピンクに見えている人からしたら、どう見たらこれが青と白なのだろうとなると思うのです。私からは青と白に見えているのですが、青と白に見えている人からしたら、これのどこにグレーとピンク性があるのだということになります。知覚心理学の文脈だと、同じものを見ているにもかかわらず、これだけ違うものが見えるというのは当たり前なのです。

これは顔にも適用できて、同じ顔を見ていても、あるいは先ほど広瀬先生がおっしゃったように、同じものを触っていても、その先にわれわれが認識するものは全然違うのだということです。これが知覚心理学からのメッセージとして言えることになります。

#30

最後に、聴覚の話です。これを聞きます。

＊＊＊音声データ再生＊＊＊

これは何と言ってるか分かった方はいますか。なかなか難しい。もう一回流します。

＊＊＊音声データ再生＊＊＊

多分、分からないと思います。これの元の音声を流します。

＊＊＊音声データ再生＊＊＊

「好きな食べ物はラーメンと餃子と麻婆豆腐です」。これを一回聞いた上で、最初の音を一回流してみます。

＊＊＊音声データ再生＊＊＊

これはかなり聞こえると思うのですね。これが何か分かるようになったというレベルではなくて、もうガラッと認識が変わっている感覚は伝わりましたか。相当違うということです。もう一回流してみます。

＊＊＊音声データ再生＊＊＊

聞こえます？ 先ほどの顔に見えたのと同じように、ノイズのような音が何かの手掛かりによって聞こえてしまうということです。

#31

少し宣伝になるのですが、こういう視覚の原理みたいな話、あるいはその個人差や可塑性の話をまとめた『なぜ壁のシミが顔に見えるのか』という本を去年の秋ぐらいに出していただきました。こういった学術書、しかもシリーズものにしては珍しく、朝日新聞の書評でも取り上げていただいています。もしよろしければ、今日の知覚の話がたくさん載っているので、興味がありましたらぜひ読んでいただければと思います。

#33

最後に少しまとめになりますが、顔身体とコミュニケーションということで、これまでの実験で解き明かしてきた顔認知の普遍性というものの疑わしさ、これは明らかに知覚心理学のところ、考え方ではなく知覚のレベルから人によって違うということです。それは恐らく、教育、発達、言語、環境といったものの中で、見ているものが同じでも見え方がいろいろであるということが生まれてくるのだろうということです。

このプロジェクトに関しては、見えている世界、あるいは知覚している世界の多様性みたいなものにどれだけ自覚的になれるか。これは、あちらの文化とこちらの文化という話でもなくて、同じ文化内、ここにいるわれわれの中でも全然違う捉え方をしているということ、知覚によって違うということは先ほど示されたとおりです。この辺りを手掛かりに、これはすごくミクロなレベルなのですが、出発点にできたらいいのかなと思っております。ありがとうございました。

（床呂） 高橋先生、短い時間でコンパクトにまとめていただいてありがとうございました。先ほどの広瀬先生のお話に続いて、非常に刺激的なお話でした。現代が顔偏重社会であるというのは、先ほどの広瀬先生の視覚中心主義みたいな話ともどこかで通底するような気がします。それから、WEIRD 問題の話など、まさにこのプロジェクトの趣旨説明でも申し上げましたが、ある種の身体に関する暗黙のうちの普遍主義というか、実は暗黙のうちの西洋中心主義的な身体観があるのではないか。それを相対化して乗り越えていくという、プロジェクトの趣旨の中でも大変重要なご発表ではなかったかと思います。いろいろご質問等があろうかと思いますけれども、繰り返しになりますが、質疑応答は最後の時間帯にまとめて実施したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それではプログラムに沿いまして、次は三人目のご登壇ということで、北海道大学のケイトリン・コーカーさんにお話しいただければと思います。ケイトリン・コーカーさんのご紹介をさせていただきたいと思います。ケイトリンさんは北海道大学に勤められて、専門は文化人類学ということです。今日のご本人の話の中で詳しくはあろうかと思いますけれども、日本におけるダンス、暗黒舞踏や、最近ではポールダンスのご研究を専門的にされています。中でも、まさにある意味では人類学の王道というか、参与観察的な手法を使って、ポールダンスを含むダンスをご自身で実践されて、そこでの活動を通じた気づきや知見等もフィードバックしながらご研究を続けていらっしゃいます。本日は「『ダンス村』―私たちを引き離し、私たちを結びつくもの」というタイトルでご発表いただければと思います。ケイトリンさん、よろしくお願いします。

「『ダンス村』―私たちを引き離し、私たちを結びつくもの “Dance Village” ―what pulls us apart brings us together”」

ケイトリン・コーカー（北海道大学）

今日はお呼びいただき、ありがとうございます。私は北海道大学文化人類学研究室の准教授を務めているケイトリン・コーカーです。二〇〇六年に来日してから暗黒舞踏とポールダンスについて、身をもって踊りながら人類学的な研究を行ってきました。研究の一部として、踊ることで思考する、そして考えていることから踊りを作るという循環をしてきました。本日のチラシの写真は、私が振り付けて踊ったポールダンス作品です。教育の現場、私の授業でも、実際に踊る、あるいは体を動かすことを取り入れています。素朴に言えば、身体抜きでは身体論が成り立たないと思っています。

私の研究では、暗黒舞踏なので身体の変容可能性について考えてきましたが、社会分断や多様性についてあまり考えてこなかったので、今日はまず自分のことから考え始めようと思っています。私は、外国人女性として日本社会のマジョリティ側から引き離されていると感じたことと、その痛みについて話します。そして、ダンス村という概念とその事例を用いて、人々と共に踊ることで、人とどのように新たに結びつくことができるのか、身体には何ができるのかを考察したいです。

まずは、外国人女性としての経験について話します。外国人や女性というのはもちろん本質的なカテゴリーではなく、私の外見、容姿、つまり身体を基にレッテルが貼られるということだと言っておきたいです。日本でも、まず私はアメリカ国籍であり、白人であること、英語を母語とすることで優遇されて特権的な身となってしまいます。私はこの特権を持った

上で努力して生活ができているわけですが、この特権を持たない人たちが努力してもアクセスできないような機会や資源に恵まれているということをまずは言いたいです。つまり、誰かに特権を持たせたと同時に、他の誰かから資源や機会が奪われるという、社会構造の制度的な差別が繰り返される中の現象です。同様に、何々人という共同体を想像するのには外国人と思われる人々の排除が含まれており、日本人という言説の裏に外国人という言説があり、男性の社会的な地位と表裏一体に女性の社会的な地位が作られていることも示しておきたいです。

私は、このような特権を持ってしまうと同時に、日本で外国人というマイノリティ性も持っています。例えば、外国人だからという理由で賃貸の入居および宿の宿泊が断られたことや、警察に職務質問されたこと、商業施設で目を付けられて疑われたことがあります。差別用語である「外人」とたびたび呼ばれ、人種差別的な落書きの誹謗中傷に遭ったこともあります。また、私の話している内容ではなく、私の日本語使用という話題にすり替えられることがあります。これらのようなとき、私はこの社会への参加が拒否され、二次元の外国人像に落とし込まれているように感じます。「われわれ日本人」と言うことで、マジョリティの和人のアイデンティティや連帯感が強まる一方、マイノリティの私の疎外感が生じます。

また、女性というマイノリティ性も持っています。特に、私自身は来日以降、痴漢や性的ハラスメントを含む性的暴力に遭ったことが挙げられます。例えば、夕方、近所のツタヤでレンタルDVDを見ていたときも、仕事帰りに家の近くまで自転車をこいでいたときも、エスカレーターに乗っていたときも、大学の講義で私がレクチャーをしていた最中も、その後も性暴力の被害に遭っています。いずれも、周囲の誰かに助けてもらえないことや、警察などからの二次的な被害のみならず、人種差別を受けることもありました。このようなとき、しばらくの間、無力感に覆われます。そのときは自分の体が奪われて消費されて、自分のも

のではない、私は皆と同じような人間ではないというように感じます。

性的被害や人種差別は個人と個人との間の問題と思われがちですが、社会の構造がこれらの問題を維持し、再生産しています。例えば、ジェンダーギャップがあるからこそ、ジェンダー暴力が生じると考えています。私の経験は個別の問題ではなく、社会構造の問題です。ですので、これらの問題を超克するために、根源となっている構造を変えなければなりません。ここで、社会の中からどのように社会を変えられるのかという新たな問題が出てきます。社会の中でも社会を作り直すに当たって、「ダンス村」を参考にしたいです。

「ダンス村」は、私が日本の舞踏について研究する中で聞き取った言葉です。舞踏とは一九五〇年代の日本で生まれた前衛的なパフォーマンスです。私は、舞踏の創始者の土方巽の弟子や孫弟子、あるいは土方と交流があった方々に絞って、一九六〇年代から一九九〇年代の舞踏を踊った方々の公演を見て、彼らのワークショップで自分も踊って、お話をたくさん聞くという研究を行いました。そこで一つ分かったのは、公演のリハーサルの他に、共同生活を送る稽古場、ショーを披露するキャバレーあるいはストリップ劇場の大切さでした。

舞踏家の和栗由紀夫さんは、稽古場とキャバレー、どちらも「ダンス村」だったと言いました。和栗さんの言葉を読み上げます。「ダンス村にね、スポッと入っちゃってね。社会から隔離されているわけじゃない？　僕は一日、電車に乗る以外は、劇場の楽屋にいるか、稽古場で稽古しているかという。とにかく、いずれにしても、ダンス村なんですよ。稽古場も、ね。いきなり、そういう所に飛び込んじゃったから。ある意味で、心地よさ。社会からちょっと距離を置いて、自分たちだけの」。

ここで言う劇場はストリップ劇場なのですが、和栗さんの先輩だった舞踏家の小林嵯峨さんが、キャバレーあるいはストリップ劇場のダンサーたち、すなわち踊り子たちについて言ってくれたことを次に読み上げます。「踊り子さんたちは楽屋で裏も表もないわけですよ。

皆、裸で、お化粧していて舞台に出ていって裸で帰ってくる。社会的な一番下の地位、そこまで行けばお互いに何も隠すことはない。本当に余分なものを取り払った付き合いができた。素敵な人たちばかり」。

つまり、踊り子になると、社会的に一番下の地位に置かれます。芸能に関わる者が下の地位に置かれるという歴史はありますが、ここで女性のマイノリティ性、働いているジェンダー規範も窺えます。近代以降の女性の理想像は良妻賢母で、女性が自分自身の官能的な性を表現することは非難され、風俗で働くことは下に見られます。そもそも、女性が性的な願望を持つことは認められておらず、女性は男性の性的な願望を満たすための役割に回されることが多々あります。または、女性の裸体そのものはわいせつとみなされます。これらのジェンダーにまつわる規範や期待がありますが、舞踏家も踊り子もジェンダー規範から逸脱して、社会の一番下に置かれ、一般社会から引き離され、周縁化されていました。ただ、周縁であるからこそダンサー同士の関係、その場、踊りそのものが生まれてきて、観客との特別なつながりができたとも考えられます。

和栗さんと小林さんに「ダンス村」について教えていただいたのは二〇一二年になりますが、人々と共に踊ることで必ずしも「ダンス村」が経験できるというわけではないと思います。自分の研究から事例を取り上げて、「ダンス村」がどのようにできるのかを考えたいです。

まず、私が二〇〇七年から通い出した「ダンス村」を紹介します。これは京都を拠点にしている今貂子さん主宰の舞踏集団の稽古場です。そこでは週二回の舞踏ワークショップ、そして今さんが振り付けた「舞踏カンパニー今貂子＋倚羅座」のリハーサルがあります。

今さんは一九八〇年に白虎社という舞踏集団に入団しましたが、その際は周囲の理解が得られず、両親に「家系に河原者はいない」と反対されたと教えてくれました。白虎社が

一九九四年に解散した後、今さんは稽古場を引き継ぎました。この稽古場は京都の東九条にあります。この地域には在日韓国人がたくさん暮らしていますが、京都特有のこの地域自体への差別が明らかで、京都なのに、京都から少し距離が置かれたような場所でした。今でもそうだと思います。

稽古場の玄関から上がると、何も置いていない広い部屋があり、そこでワークショップとリハーサルを行っています。ワークショップでは身体を動かし、終わった後にお茶を飲みながら談話をします。ワークショップで育てられた踊り手は公演に出られます。私がいた間は、公演に向けて準備をしているときは稽古場で長時間過ごし、出演者は空いている時間があれば稽古場にいるというスケジュールでした。こんなときは一緒にお味噌汁やお菓子を食べたり、休憩したりして、第二の家のようでした。

ワークショップの参加者は老若男女、職や学歴、国籍などもさまざまでした。女性の割合が多かったのですが、男性も参加していました。例えば、愛称「みやん」という男性がいて、私より十四歳上の一九七一年生まれでした。スキンヘッドであまりしゃべらない方ですが、お酒を飲むと頭に爪楊枝を刺すというような滑稽なこともする人です。大きな目が特徴で、顔や頭の形はハリウッド俳優のサミュエル・L・ジャクソンに似ているかと思います。ワークショップで私がみやんとペアワークをしたことがありますが、みやんとまだしゃべっていないようなときで、多分どちらも緊張していたと思うのですけれども、向かい合った状態で、一人が前にゆっくりと倒れて、もう一人が倒れた人をキャッチして支えるという、身体の緊張と脱力、そして身体を他の誰かに委ねるというワークでした。ぜひいつかお友だちなどとやってみてください。このとき、みやんが先に前に倒れたら、身長の差で、私の支える手がちょうど彼の乳首の位置に来てしまいました。そこで彼はすごく恥ずかしそうな顔をしていて、それを見て私は手の位置に気づいて申し訳なくなりました。しかし、そのときにみやん

が「バスト・オーケー」と言ってくれたのを思い出すと今でも笑います。そこから彼と深い信頼関係を築くことができました。みやんと一緒の舞台は、女性に囲まれてスキンヘッド一点となりました。

先日、みやんに、皆で踊るのはどのような経験だったのかと聞いたら、彼は次のように答えました。「舞踏手それぞれに個性があり、群舞などで同じ踊りを踊っても、いい意味でバランスが崩れました。それを気に入っています」とのことでした。

舞踏では踊り手が何かによって動かされるという状態を目指すことがあります。そのため、人間以外の何かになることが多いのです。例えば、体が水の入った風船になったとしたら、水は自分の中と外を循環し、水の動きによって自分が動かされます。また、体が種になったとしたら、種から萌え出て木々に育っていくことが体そのものとなる動きが生まれます。イメージや何かの現象と共に動いたら自分がどこまで行くのかというような問いかけです。先ほど、動かされると言いましたが、自分の興味と意識をその現象に向けており、体をその現象が開かれる場として提供しています。何が開かれるかが本人も分からないから、みやんが思い出させてくれたように、それぞれの個性が表れ、「いい意味で」バランスが崩れたと思います。

二〇〇七年にインタビューしたとき、今さんは、体は書物のようなものであり、それを開いて内容を読みたいと言っていました。自分の体についての言及だと思いますが、ワークショップの参加者の動きについて、今さんは、舞踏っぽい動きや周りと同様の動きをする人よりも、個性的な人や独特な動きをする人に興味を抱き、評価することがたびたびありました。今さんは、予測できないような動き、もしくは期待を裏切るような動きをする人を評価する傾向があったように思います。今さんのワークショップでは、体そのもの、その偶発性・予測不可能性が知恵を紡ぎ出してくれる本のようです。ところが、体は私だけではなく

て、相手の体を見て、触れ合って、他者の体・運動からも、今まで知らなかった何かを知る教材となるとワークショップで考えるようになりました。

そして、踊っている今さんとの触れ合いがありました。今さんのソロ作品を見て、私は震えて涙を流すことが何回かありました。今さんは全身を白く塗り、赤いふんどし一丁で、束髪にお歯黒。今さんは強くて格好良い女性なのですが、ワーッと足を深く曲げて踏みならし、予測不可能なタイミングで勢い良く突き進み、パッと静止して、また予測できないタイミングで跳んで悲鳴を上げる今さん。今さんの踊りの背景に彼女の哲学があり、その哲学について説明する意義がありますが、それより、今さんの踊りから感じさせられる何かに対して私は興味があります。今さんは広い劇場でも全ての空気を支配できて、自分の皮膚から爆発して私の中に突入します。踊っている今さんを何回か見ていると、私の中に何か残っている、蓄積している、沈殿しているように感じます。

また、踊り手の中で日本人の出自を持たない者は私だけでした。舞台の制作では日本の芸能に関わるさまざまな歴史が題材となりますが、アメリカ人の私がこれを踊っていいのかという、文化盗用の懸念があると思います。しかし今さんは私に、「ケイトリンの心は日本人だから」と言いました。このような一言によって、この集団・稽古場にいてもいいのだと感じて、一員として認められていることを実感しました。

今さんの稽古場には私は二〇〇七年から二〇一二年くらいまで通っていましたが、短期間で「ダンス村」の体験ができる場合もありました。これは一九七二年に創設された麿赤兒さん主宰の「大駱駝艦」という舞踏集団による夏合宿で、その参加者は日本国内外から長野県の白馬村に集まります。そして九日間、朝から晩まで日常生活を共にしながら舞踏の稽古とレクチャーを受けて、最後の夜に全員で野外公演を開催します。毎朝のお掃除、朝食の調理、稽古場までのマラソンから、広い大浴場に浸かり、三〜四人で同じ部屋で寝ることは全部一

緒でした。

先月、齋門由奈さんという、二〇〇九年の合宿のときに私と同じ部屋に寝ていた参加者と十五年振りに話しました。齋門さんは初めて大駱駝艦の合宿に参加した後、入艦して大駱駝艦のメンバーとして活躍し、毎年合宿に参加し続けています。十五年振りの再会でしたが、顔はあまり変わっていませんでした。よく体を動かし、いっぱい面白いことをして、たくさん笑ってきたような顔でした。そのときの齋門さんの言葉を参照しながら進みます。合宿は体に没頭する時間でした。例えば、夜の麿さんのレクチャーでは、大駱駝艦メソッドの一つである「身振りの採集」という項目があり、非日常を体感しました。具体的に例を挙げると、日常で普通に歯を磨いているときに、チクッとして、「あれっ、虫歯」と止まって、歯を磨いているという日常でも非日常に入る瞬間があるというように言ったことが印象的でした。

非日常に入ることについて、齋門さんは次のように言いました。「日常の行為、例えば、台所で包丁を使い、野菜を切っていて、『はっ！ 痛い』。次の瞬間、指から血が出ているという事件が起きたとします。いつも流れている日常の中に、ほんの一瞬、『はっ！』という、空白の時間が生まれます。普段、私たちはそこには気を止めず、血が出たことを気にするでしょう。しかし、その『はっ！』とした空白の時間こそが、非日常の入り口です。そこに焦点を当てつつ、麿さんの言葉を頼りに、それぞれの世界観を深めていきます」ということでした。

齋門さんのお話からインスピレーションを受けて、この会場に置き換えてイメージを作ってみます。皆さんは次の私の言葉を聞いて、想像してください。

そのとき、皆さんは、一瞬「はっ！」。首の後ろに、ほんのわずかな違和感を感じます。ちく、ちくちく。小さなアリが一匹、首の後ろを這っています。アリは首を下にゆっくりと、ちくちく、ちくちく…。

ここで終わりますが、何かを感じましたでしょうか。何か表面的あるいは内面的な動きがあったのでしょうか。この会場から出た後には、あれは何だったのだろうかと考えるかもしれません。このように考えると、稽古以外の時間も稽古の延長のように感じられます。全てが踊りの、体の稽古です。

「ダンス村」だと感じさせられたのは、稽古だけではありません。外国人のための通訳もありましたが、麿さんのレクチャーのとき、私はいつも麿さんの近くに座って、「この人は何を言っているのだろう」と、その言葉をすごく味わっていました。ある日、麿さんは私のところに来て、両手で私の顔を持って、「君は僕の言葉を理解しようとしている」と言ってくれました。麿赤兒さん、想像できますか。「私にしゃべっているんだ」とまず衝撃を受けましたけれども、そこまで言ってくれました。このとき、深い優しさ、愛情を感じました。稽古と思うと個人の修練が思い浮かびますが、そうではなく、身体も言葉も駆使して、自分と他のもの、あるいは他の知らない何かとつながっていくような時間だった気がします。

齋門さんも、麿さんのレクチャーから次のように感じたと言いました。「私が、初めての麿さんの講義を体験したときは、誰かがどこからか『あなたは、あなたでいいのですよ』と。そんな声が聞こえてきて、気づいたら涙ぐんでいた。何とも言えない感覚になったのを覚えています」と教えてくれました。文脈としては、当時、齋門さんは二十五歳で私は二十四歳でした。

そして、最後の野外公演がありました。この舞台は金粉ショウだったので、全員で楽屋で裸になって、ツンという金色のTバック型のパンツを履き、サラダオイルに金の粉を溶いた液体を体に筆で直接塗るのです。最後なので、合宿で緻密な時間を過ごして一丸となっていたと思いますし、個別にみんな楽屋で塗っていて、鏡で自分の体を見て「うわあ、光が動く」とやっていた女性もいた覚えがあります。抵抗感があるとはあまり感じないのですが、もち

ろんキャバレーのショーとしての歴史もあり、躊躇していた人もいたと考えられます。齋門さんは「私の親も反対していた。不安がなかったわけではない。ただ、結局のところ、ひかれる何かに引き寄せられてしまって、やりたいと思って飛び込んだ」と言っていました。

私は楽屋から出る前に、観客の前に立つと体がどのように見られるのかが心配でした。女性の体は誰かに、特に男性の目線で見られたら、彼らのもの、彼らのための性的客体になることを恐れてしまいます。そして、金粉の姿で舞台に歩いていったとき、私の前で年配の女性がしゃがんでパシャパシャと写真を撮って、「美しい…」と独り言のように発してから去りました。金粉を塗っている状態で、その姿から、私が踊っている今さんからもらったような力をそのおばあちゃんがもらって、その言葉が思わずこぼれたような言い方でした。この瞬間、自分の身体はわいせつでもなく、性的客体でもないこと、自分の体は創造的な力に富んでいることを、このおばあちゃんに教えてもらいました。

齋門さんは、金粉ショウで体を見せることは体の価値を提示することだという考えを教えてくれました。「皆、誰もが、生まれながらに唯一無二の身体を与えられています。それこそが才能であるという考えが、磨さんの言う『天賦典式』であり、大駱駝艦の理念です。その才能を最大限にステージの上で表現する、提示する、そのための演出方法の一つとして金粉ショウがあると思います」と言っていました。齋門さんが言う価値は、できる人が評価されるということではないのです。むしろ、できない自分を認めて、できないからこその身体的な変容を味わうのです。冒頭で話したような差別あるいは暴力を受けてしまうときは、自分の身体そのものが価値の低いものと感じてしまいます。しかし、こういった踊りは、そもそも身体があるという存在条件を満たしていることは非常に価値のあることだと教えてくれます。

これらの「ダンス村」の共通点は、主流社会から少し離れているような場所、この場所に

参加することに対しての一般社会からの批判的な反応、そして日常と違う方法で身体に向き合う実践、お互いを認め合う身体的かつ言語的なコミュニケーション、身体や身体として生きることについての哲学だったと考えていますが、それぞれの場所での出会いが重要でした。踊ることで、相手の体を見て、触れ合って、今まで知らなかった何かを知る、自分と他のもの、あるいは他の知らない何かとつながっていくという、踊りの非日常にこそ、人と新たに結びつく可能性があるということが分かりました。自分自身に対しても、自分ができていない、あるいはバランスが取れていないと思われるようなところこそ、自らの身体変容と自分の身体のかけがえのなさが明らかになることで、自分自身と出会い直すことができるとも考えられます。

これらの出会いのおかげで、踊ることは自分の力、そしてどこかの誰かの力、生きるための力を循環させられていると何度も身をもって知ることができました。日常の差別およびジェンダー暴力で体は戦場のように感じますが、今まで出会ってきた人々は自分自身そのものを形作っていると考えれば、踊ることで自分の体そのものが「ダンス村」なのです。

最後に、本日の発表原稿を何度もお読みになってご指導くださった今貂子さんと大駱駝艦の齋門由奈さんに感謝を申し上げたいです。ご清聴いただき、ありがとうございました。

〔床呂〕　ケイトリンさん、ありがとうございました。ご自身の、まさに日本の中で一種のマイノリティとして暮らすことによる差別や暴力の経験のお話から始まって、「ダンス村」でのダンスを通じたフィールドワークのお話、身体的な経験を通じた、異なる身体的な可能性を模索できるような、非常に啓発的な興味深いお話だったかと思います。前回の「身体性の人類学」という、私の趣旨説明のところで申し上げたプロジェクトでも一度お話しいただいたのですが、そのときは実際にその場の他の参加者の人に、一緒に立って、踊りというか、

ある種のボディワークなどもしていただいて、あれも非常に印象に残っております。またそういうボディワークを含めたワークショップ的なことも、このプロジェクトでも試みられたらいいかなとも思います。

コメントやご質問等あろうかと思いますけれども、この後、休憩をはさんで総合討論の時間に、今のケイトリンさんのご発表も含めて、それから最初の広瀬さん、高橋さんのご発表に関するご質問やコメントも含めて、じっくりディスカッションができればと思います。

その前に、プログラムに従いまして、いったんここで休憩とさせていただきたいと思います。すみません、私の仕切りが悪くて若干押し気味なので、当初は十五分を予定していたのですが、十分ちょっとということで、四時二十五分再開でもよろしいですか。では、四時二十五分までにこの会場にお戻りください。

――休憩――

（床呂） よろしいでしょうか。シンポジウム再開の時間になりましたので、いよいよ総合討論、質疑応答、ディスカッションの時間に移りたいと思います。恐らくフロアでご参加の皆さまもたくさんご質問やコメント等があるかと思いますが、一般のフロアの方に議論を開く前に、まずは本日お招きしたお二方のコメンテーターの先生方からのコメントを頂きたいと思います。そのレスポンスの後で、また会場に開きたいと思います。

本日お招きしたコメンテーターお二方のうちの最初のコメンテーターは、國學院大學の小手川正二郎先生です。小手川先生は哲学がご専門です。特に現象学ということで、趣旨説明のときにも言及させていただきましたが、例えば人種の現象学、あるいはジェンダーを巡る現象学といったユニークな観点から差別や社会的分断、あるいは身体性の問題などについて

も精力的に哲学の立場からご研究されているということで、主に哲学の観点からのコメントが頂けるのではないかと思います。それでは小手川先生、よろしいでしょうか。お願いいたします。

Ⅲ　コメント

コメント一

小手川　正二郎（國學院大學）

國學院大學の小手川と申します。最初に、三人のご提題が本当にどれも素晴らしくて、本当にいろいろと示唆を受けるばかりでした。哲学という全く分野外の者から的外れな質問になってしまうかもしれませんが、お一人ずつに質問があります。

#2

まずは広瀬先生のご発表については、「ユニバーサル」の捉え直しという点に深く感銘を受けました。広瀬先生の捉え直しによると、さまざまな感覚から成り立っている触角センサーが現代は過度に視覚に依存してしまっている状態になっている、あるいはそういう状況に置かれてしまっていて、そこから本来の配分やバランスを取り戻すというところにユニバーサルというものの意義を見出されているように感じました。例えば広瀬先生は聴覚障害者の方との共著もあると思うのですけれども、聴覚障害を持っている方の場合は、より視覚に依存するところが大きいと思います。また、いわゆる健常者の方とは違う形で視覚を使ったり、あるいは他の感覚、触覚などとの協働があるのかと思います。ですので、本来の配分やバランスに戻すときに、恐らくは「本来の配分やバランス」は当人が持っている能力、あるいはその人がこれまでどういう人生をたどってきたのか、今どういう能力を持っているの

か、あるいは環境などに左右されるところが多いのではないかと思いました。

そういうことを考えたときに、広瀬先生がおっしゃったように、現代はあまりにも視覚に依存しやすくなっている環境が問題であるということは私も共有しているのですが、そのときの問題性としては、どのようなことをお考えでしょうか。例えば、よく障害学などでいわれますが、依存先が少ないと不測の事態に対応しにくくなる、あるいは視覚に過度に依存してしまっているのは豊かではないなど、いろいろな理由があると思います。他にも何か、こういう理由で現代社会はあまりにも視覚に依存していて、それはやはり問題があるのではないかということがありましたら教えていただけたらと思います。

あとは、触角センサーを取り戻すということも非常に興味深いと思いました。ユニバーサル美術館には私はまだ一度も訪れたことがなくて、ぜひ行ってみたいと思っているのですけれども、それをどのように習慣の変容につなげていけばいいとお考えでしょうか。これは私たちが人種差別的な習慣を何かしら持っているときに、どうやって変容させるかというときによくいわれることなのですが、一回限りでのワークショップなどで習慣が変容できるかというと、なかなか難しいのが実状です。例えば美術館での鑑賞も、様々な触覚経験に気づくきっかけにはなると思うのですが、私たちが日常生活に戻ったときに、生活習慣の中でその触角センサーへの気づきをどうやったらずっと持続的に生かしていくことができるのでしょうか。もしそういう点に関してご存知のこと、あるいはご自身でなさっていることがあったら、ぜひ教えていただきたいと思いました。

#3

次に高橋先生への質問です。現代を顔偏重社会と規定され、顔だけを取り出すということが本来不自然ではないのか、顔の特定の部位に注目することが本当に普遍的なのかどうかと

いう疑問は大変興味深かったです。そのうえで「顔偏重社会」といったときに、たんに顔を重視しているということなのか、それとも、先ほどご発表にもあったように顔の特定の部位、目や口などを過度に重視しているということなのか、つまり顔全体を重視しているのか、あるいは顔の特定の部位を重視しているのか、あるいは静止画で捉えられている顔だけを重視しているのか。発表の最初にあったFacebookの話などもそうだと思うのですが、顔偏重といっても、いろいろな層やレベルが考えられるのではないかと思いました。

とても興味深かったのが聞いているものが一緒でも聞こえているものは違うというお話です。聞いているものの事例で、私は視覚情報と一緒に聞いているかどうかが重要だと思っていて、視覚情報が与えられて聞いている状態とそうではない状態での聞こえ方は異なるのではないかと思います。その場合には、視覚だけには限らないと思うのですが、他の感覚とどのように聴覚が働いているのかというような視点が必要なのかと思いました。

あとは、実際に高橋先生が示された例は、手がかりによって聞こえ方が変わるという例なのかなと思いました。先ほどの広瀬先生が「求める」ことの重要性をお話しされていて、その点と関連するかと思ったのですが、単に何かを触っているだけではなくて、何かを求めながら触るとなると、かなり違う知覚のモードになるのかなと思います。それは聞こえることにも当てはまって、何かを単に聞いているのと、ある程度、何か前提が与えられていて、それを求めながら聞いているということの知覚のモードが変化している可能性があるのではないかと思いました。

#4

最後に、コーカー先生への質問です。コーカー先生のご発表も本当にさまざまな論点があって、特に私自身がジェンダーに関心があるので非常に興味深く伺いました。ただ、伺っ

てから質問をまとめるまでの時間が短かったので、本当に感想みたいなところが多いかもしれないのですが、論点としては二つあります。

「ダンス村」というものが、その名称に「村」という言葉が使われるのも興味深いと思ったのですが、そこで単に共に踊るだけではなくて、例えば一緒にお茶をしながら話をする、あるいは一定期間一緒に暮らすなど、共に生活をするということが重要なのかなと、伺っていて思ったのですが、それはなぜ重要なのでしょうか。「ダンス村」が成立するために、単に共に踊るだけではなくて、共に暮らすということがなぜ重要なのかということを考えるときに、いくつか要素があると思います。お話しになっていたのは、互いに隠すことが何もなくなるとか、自分のことを相手にさらけ出すことができるとか、そういう信頼関係に関する要素が重要なのだと思ったのですが、他にもいろいろな要素があると思うので、共に生活するということが「ダンス村」の成立にどのように関わっているのかということをもう少し伺えたらと思いました。

それから、この研究プロジェクト全体にとっても重要な身体の変容という観点について言うと、共に生活する、日常を共にするということが大事である一方で、日常が崩れるというか、日常から非日常に入るという点も強調されていました。バランスが崩れるというのもなるほどと思ったのですが、それが単に身体的な修練ではなくて、自分が知らないものとつながるという契機が重要なのかと思いました。日常から非日常に入ることがどういうことなのかということも、考え出すと切りがないと思うのですが、今回のご発表で特に私が印象に残ったのは、日常生活を送ることに私たちが普段適応している身体のあり方があったとして、それが崩れたり、いつもとは違う自分の可能性に気付いたりすることが身体の変容につながるのかなということです。

もう一つは、それをパフォーマンスとして見せて、それが誰かに見られるということです。

おっしゃっていたように、そのときに「普段」というか、男性中心的な社会の中で男性から見られることとは違う形で見られるということに気づくのが重要なのかなとは思ったのですが、こうした私の理解が本当に合っているか、あるいはもう少し補足していただけることがあったら、ぜひいろいろ伺ってみたいと思いました。

〔床呂〕 小手川先生、どうもありがとうございました。ディスカッションの出発点として非常に相応しい、個別具体的な質問をたくさん挙げていただいたコメントでした。ありがとうございました。割と個々のご発表者の方への具体的な質問があったので、すぐにレスポンスされたいというご発表者の方もいらっしゃるかとは思うのですが、進め方として、もうお一人のコメンテーターの大石先生のコメントを先に伺ってから、それへのレスポンスを後ほど三人の発表者の方に聞いてみるという順番でやりたいと思います。よろしいでしょうか。

ということで、二人目のコメンテーターの東京外国語大学の大石高典さんにコメントを頂ければと思います。趣旨説明のときにも申し上げましたが、大石さんは専門としては人類学、文化人類学、それから生態人類学的なご研究もされています。フィールドとしてはアフリカということで、アフリカ研究的な文脈からのコメントももしかしたら頂けるかもしれません。それでは大石さん、用意がよろしければお願いします。

コメント二

大石　高典（東京外国語大学）

ご紹介にあずかりました東京外大の大石です。よろしくお願いします。

#2

早速、三人のご発表についてなのですが、広瀬さんの発表で私が一番心に沁みたのは「触角」のことです。昆虫の触角と同じ字をレジュメの方で使われていましたが、触角という言葉が出てきました。それは身体的に目の不自由な方が環境を把握していくときに、全身のセンサーをいろいろな形で鍛えていくということでした。そういった極めて高度な触る技が、瞽女さんたちの芸能や琵琶法師の技にもあったということから、お話が発展していったと思います。

僕がこの話を聞いてすぐに連想したのは、自分がアフリカの熱帯林で研究している狩猟採集民、あるいは焼畑農耕民の人たちと一緒に森を歩いたり、夜にナマズ漁に出掛けたりなどいろいろしたときのことです。彼らは、多くの場合目が不自由なわけではないのですけれども、森というのは周りが見えにくい環境なわけです。暗いし、張り出した樹木の枝や根っこなどいろいろな障害物があるし、特に頭上のものなどは見えません。そういう中で環境を察するということが、サバイバルの上でも、生業で成功を収める上でもすごく重要になってきます。そこでは、例えば蜂蜜の季節に、どこにミツバチの巣があるのかということを非常に広大な森の中で見つけなければいけないのですが、見えないものを見るという話は、自分がフィールドとしている人たちの森を感じるあり方とも共通している部分があるなということ

を感じながら聞いていました。そんな風に考えてみると、お話を伺っているうちに、もっと身近なところでも、われわれもそういったことに近いことをしているかもしれないというように感じるようになりました。

広瀬さんに、世界把握の方法としての「触る」ことをいろいろな形で実際に実演しながら教えていただいて、心に沁みてくるのは、先ほど床呂さんもおっしゃっていましたが、いかに自分が視覚中心主義に深く染まっているのかということでした。そのことを改めて思いました。同時に、盲学校や琵琶法師の技術というか、技というか、触ることから見えてくる世界、そういった「触覚」を磨く身体文化が今後どのようになっていくのかということについて広瀬さんは触れておられました。目の不自由な人たちが連綿と培ってきた身体知を安易な画一的なやり方でマジョリティ側にインクルーシブ（包摂）してしまうと、その大事な部分が失われかねないのではないかということも広瀬さんはおっしゃっていました。

ここが最後の全体へのコメントにも関わるのですが、このシンポジウム全体のテーマが「社会的分断」となっているのですが、隔たりをただつぶせばいいという話ではないのだということが、議論の前提として共有されたのかなと思いました。

また、当事者尊重は大事なのですが、当事者だけに閉じてしまうのは良くないという話があって、これもカメルーンの先住民の人たちとの中で類似の議論が出てきたのを思い出しました。私の研究対象のひとつはバカ（Baka）やバギエリ（Bagyeli）という狩猟採集民／元狩猟採集民です。その人たちの間で、自分たちが関わっていないところで先住民のことを語るのは一切許せないみたいなことを言う人もいるのですが、それに対して別の当事者から反論があったりして、そういった現地での議論を思い出しました。

#3

次が高橋さんの発表についてですが、一言で言うと、僕たちが普通に「顔」だと思うことの前提を問うような話でした。僕も高橋さんと一緒にカメルーンで研究をしているのですが、タブレットを農村部持っていって刺激を提示するというフィールド実験の中で、今日、高橋さんがお話にならなかったことを少し補足します。例えば、実験の流れで描画実験もしたのです。「顔を描いてください」ということをするのですが、これはカメルーンだけではなくて、ケニアやタンザニアでもそうで、「顔だけ描いて」と言っているのに顔だけでは描いてもらえなかったという話があります。つまり身体の全体イメージを描いたり、あるいは牧畜社会では逆に内臓の一部分を描いて、それが「顔」だと言うという話がありました。顔だけを特権的に切り出すというので、顔の中のパーツの話が今日はメインになっていましたが、そうではないつながり方で顔が認識されている部分も、アフリカのフィールドについてはあるのではないかと思います。

それから、カメルーンのフィールドで特に印象深かったのは、高橋さんも少し言及されましたけれども、顔文字とリアル顔を比較していろいろな実験をしたのですが、端的に言って、非常に簡略化された顔文字という記号に対して、少なからぬインフォーマントからものすごく強烈な違和感の表明があったということです。「これは死んでいるのではないですか?」「これは埋めてから死後何日なの?」といった質問が来ました。つまり分解中の顔だと考えたということです。「そんなものを見せて、おれに何を聞きたいのか」ということを結構しつこく言われました。

ただ、そういう意味で言えば、僕のフィールドでは記号化しないリアルな顔認識の方が強いと思うのですが、ではなぜ仮面を使うのかという問いも浮かびます。仮面文化があるし、仮面を使った儀礼の踊りみたいなものはたくさんあるわけです。ピグミー系の狩猟採集民の

人たちは仮面といっても、いわゆる目・口・鼻がついた仮面ではなくて、チアリーディングの人が使うボンボンを巨大化させたようなものなど、顔がない仮面が多いのですが、しかし狩猟採集民であろうが農耕民だろうが、都市のタクシーの運転手や首都にあるホテルのバーのお姉さんなども含めて、これまでの調査では基本的に高橋さんがデータで示したような形で、あまり記号的な顔認識をしているようなデータが取れなかったわけです。それはなぜなのかということを考えていますが、納得できる説明はまだできていません。そういうことで、同じ刺激を見ても見る人によって見え方が違うということ、顔という非常に一般的・普遍的に思える身体パーツについても私たちの文化の「普通」を疑ってみることが大事だというのが基本的な高橋さんの発表のメッセージだったかと思います。

もう一つ高橋さんの発表について言えば、学際的に越境して研究することの面白さや困難ということがあったかと思います。実験心理学者、つまり実験の設計やプログラミングを作って、あとは謝金を払って被験者である大学生に答えてもらうという研究スタイルの人が、あえてその「効率的」な研究環境を捨てて、アフリカのサバンナや森に来る。あるいは、アフリカの森やサバンナの中の村に住み込んでフィールドをする人類学者や霊長類学者のような人たちがそういった実験のデザインに関わる中で、いろいろな発見や対話があったということを申し添えておきたいと思います。

そんな中で、高橋さん自身が、フィールド語りであるとか、フィールドワーカーの認知自身が面白いということで、フィールドワーカーがどうやって心身変容をしていくのかというプロジェクトを立ち上げて成果も上げつつあると聞いています。私はそこではインフォーマントになっているのですが、自分のフィールドワーク自体が他人の調査や考察の対象になって分かってくることもあるわけです。いまだ人文系では共同研究会形式の共同研究が主流だと思いますが、このようなややラジカルな分野間の相互乗り入れというものも、共同研究と

いうか学際のあり方として、私はもっといろいろな分野で挑戦されていいのではないかと私は思っています。

#4

コーカーさんの発表は、私にはやはり冒頭と締めの部分の発言がかなり沁みるものでした。見た目やジェンダーに基づいて、日常的に暴力を受けておられるということです。「身体は戦場である」というコメントは非常に胸に来ました。なぜ胸に来たのかというと、私が働いている東京外国語大学は一番「コスパの悪い」大学だと最近週刊誌に書かれているみたいですが、私は学生さんの多様性という意味においては他の追随を許さない、国立大学一位だと思っているのですが、その職場で、やはり日常的な暴力についての語りを聞くのです。特に白人系の学生からは、例えば小さいときからエリート視されることへの苦しみというか、英語ができて当たり前と思われることへの苦しみについて。一方で、例えばアフリカンルーツの子だとその逆で、やたらと見下されたり、いじめられたり、スポーツができるのが当たり前だと勝手に思い込まれて、「なぜおまえはアフリカ系なのに百メートル走が遅いんだ」と言われるなど、そういった当事者である学生や友人のさまざまな語りを想起させる話でした。

また、研究のやり方として、暗黒舞踏とポールダンスの話が出てきたのですが、実践と思考をあくまで乖離させない形で身体を研究していくということを貫かれていて、まずそれが格好良いと思いました。その過程の中でも、ありふれた日常性への感覚をいろいろなワークを通じて磨いていくということで、この過程自体が非常にワークショップ的であって面白いと思いました。

コーカーさんへの質問としては、社会との距離／周縁性ということに関わるのですが、「ダ

ンス村」についての発表のところで、周縁であるからこそダンサー同士の関係、その場所性や踊りそのものが生まれてくるということを言われていました。この「周縁であるからこそ」というところについて、もう少し補足いただけたらうれしいと思いました。

#5

シンポ全体としては、ありきたりと言えばありきたりなのですが、「分断」を一体どのように考えたらいいのかということについて考えたいと思いました。分断があるから隔たりがあるのですが、隔たりがあることによって生まれてきたものや育まれるものもあるということで、そうしたときに、「超克」とはどういうことになるのか？ インクルージョンでもないし、グローバリゼーションでもないやり方としてどのようなアプローチがあり得るのか。ユニバーサルという言葉が広瀬先生からは出てきましたが、それも一歩間違うとグローバリゼーションにもなりかねないような言葉なので、その辺をどのように考えていったらいいのだろうか。

普遍主義的な身体観の克服ということでは、今日の三つの発表が全部、それに関わってくることだったかと思います。

また変身・変容可能性ということで、当事者の話もありましたが、実践と研究の中で関わっている人間が変わっていく。そのプロセスも、プロジェクトといいますか研究の中で意識的に記述したり分析したりしていくことがあり得るのではないかと思いました。

（床呂） 大石さん、ありがとうございました。個別の発表者の方への的確なコメント、質問と同時に、シンポジウム全体、さらにはプロジェクト全体へのある種の問題提起、コメントを頂きました。大変有意義なコメントだったと思います。

それでは三人の発表者の方、もし差し支えなければ前方にご移動いただいて座っていただいてよろしいでしょうか。

Ⅳ　総合討論

（床呂） 今、二人のコメンテーターの方からコメントを頂きました。割と今回のコメントの場合は、お三方それぞれの名前を言及されての個別具体的なコメントやご質問が多かった印象がありますので、まずは発表者の先生方に、二人のコメンテーターの方々へのレスポンス、応答を頂ければと思います。よろしいでしょうか。それではご発表順にということで、広瀬先生から今の小手川先生と大石さん、お二人のコメントへのレスポンスを。お二人を合わせますとかなりの量になろうかと思いますので、必ずしも網羅的ではなくても、一番自分にとって重要だと思われる論点だけに絞って応答されるというのでももちろん構いません。では、広瀬先生、お願いしてよろしいでしょうか。

（広瀬） はい。コメントをありがとうございました。大石さんから頂いた最後のユニバーサルのことをどう言おうか考えているうちに前に出てきてしまったので、あまりまとまらない話になるかもしれませんが、せっかく個別にいろいろご指摘いただいたので、それに答える形で、少し雑ぱくな答えになるかもしれませんけれどもお話しします。

まず、小手川さんからは三つほど指摘があったと思います。一つ目は、触角センサーの本来のバランスを取り戻すということです。これはご指摘いただいて、ちょっと僕が舌足らずだったというか、まずかったと思いました。ややもすると「おまえの話を聞いていたら、人間に視覚は要らないのか」などとよく言われるのですが、僕は視覚を使わないので、そういう意味で言うと触覚や聴覚に偏っているわけです。それを本来のバランスという考え方をするとおかしくて、小手川さんのコメントの中にもありましたが、これはやはり正確には多様性と言うべきことだったと思います。多様性でいろいろな触角センサーの使い方が人それぞ

れあって、それを許容し合う、認め合うということの方が、より正確な言い方だと思います。

触れていただいたように、今回の発表の要旨は昨年末に書いたものです。実はそのときはまだ自分の売れない本の宣伝をしようということばかりが頭にあって、要旨集には本のことばかりを書いてしまって恐縮だったのですが、昨年九月に聴覚障害、聾の同僚と共著を出しました。ずっといろいろな本を出してきましたが、なかなか売れないもので、どうしたら売れるのだろうと考えたときに、意外性のある組み合わせで本を書いたらいいのではないかということで、全く目の見えない僕と、全く耳の聞こえない相良さんという同僚で書きました。

最初の思いとしては、僕はやはり聴覚にすごく頼っているし、耳の聞こえない彼女は視覚にすごく頼っています。全く違う特性だし、ニーズも違うのだから、それを十把一絡げに障害と言ってしまうのはどうなのだろう、同じ障害でも違うのですよということをきちんとアピールしたいという思いで二人とも書き始めました。しかし、実は本を書き上げて最後に対談してみると、確かに違うのですが、やはり似ている、同じ部分があるよねとなりました。その同じ部分は、社会的な不利益を被っているというマイナスの意味の同じということではなくて、実はプラスの意味での共通点があるということに気づきました。それが、言ってみたら触角センサーの使い方がマジョリティと異なる、マジョリティの中で生きて働く中で、触角センサーの違いに苦労であり工夫を感じているという部分です。ただ、それもマイナスに受け取るのではなくて、そうやって工夫を積み重ねていることによって、人間のコミュニケーションの幅が広がっているのだという、その辺で、やはり違うのだけれども共通しているよねというところに話が向かっていきました。そういうことで言うと、繰り返しになりますが、バランスを取り戻すというよりも、やはり多様性を認め合うという方が正確だったと思います。鋭いご指摘を頂いてありがとうございました。

それから、小手川さんの二つ目の視覚優位の話です。これは僕もいろいろ考えるのですが、

やはり人類の文明が発生して文字を使うようになったということが大きいと思います。文字を使うということは、必然的に読み書きをするときに明かりが必要なわけです。その明と暗ではないですが、文字にだんだん人間が頼るようになってくる中で、必然的に明かりを必要とする。そして琵琶法師や瞽女は文字を使わない世界なので、いわば明かりが必要ないというところで、それが、ちょっと語呂合わせになりますが、近代の文明開化の時代になってきて明かりということが重視される中で、だんだん肩身が狭くなっていくという大きな流れがあると思います。

余談になりますが、文字ということで言うと、実は来年二〇二五年がわれわれ視覚障害者が使っている触る文字の点字が誕生二百年を迎えます。一八二五年に点字は考案されたといわれていますが、それから二百年たつわけです。恐らく二〇二五年に向けて、点字というものが視覚障害の教育や文化、就労を含めて大きな貢献をしたことに対する感謝であり、ルイ・ブライユという発明者に対する賞賛が盛り上がってくると思います。一方で僕はやはり、近代という時代に視覚障害の人が点字を獲得したことによるプラス面はもちろんあるのですが、逆に言うと、点字という文字が、ある意味、文明であり明かりというものに歩み寄っていく側面があって、暗の部分、闇の部分を失ってしまったということも指摘しなければいけないと思っています。ですから、視覚障害の人が文字を獲得して文明に近づいたというプラス面だけではなくて、功罪の罪の部分も、２００周年を機会に考えたいと個人的には思っています。

文字のつながりでいうと、視覚優位になっていった大きな過渡期は近代の学校教育だと思います。江戸時代の寺子屋は、いわゆる巡回指導ではないですけれども、先生が一人で、それぞれの生徒のところを回っていって、「君はこれはできたかな。はい、じゃあ次」みたいな感じで、ぐるぐる指導して回る個別指導が中心でした。そういうときは、寺子屋の中にい

わゆる知的障害の人や視覚障害、聴覚障害の人がいても個別に対応できたのですが、近代の学校教育が始まって一人の先生が同時に何十人かの生徒を教えることになったときに、黒板を使って、教科書の何ページを開いてということで視覚で情報を伝えるということが社会に定着しました。その過程で、視覚による情報伝達が主流になっていたことがあると思います。

もう一つ、視覚優位のことで言うと、これは雑談になりますが、僕が一番疎外感を味わうのは、やはりタッチパネルの普及です。特に最近、切実に思うのは、出張であちこちのホテルに行くのですが、以前はクレジットカードなどを使うと、大抵キーパッドでプッシュボタンを押せばいいものだったのが、今はもうどんどんタッチパネルになっています。ましてや意地悪なことに数字がランダムに出てくるというものがあります。あれになるとお手上げです。僕は、こんなものを作っているのは差別だなどと言うつもりはなくて、やはり悪気なくマイノリティが忘れられているのだと思います。そういうものが開発され、普及していく過程で、無意識のうちにマイノリティなど、それを使えない人がいるという発想が抜け落ちています。だから、少し嫌味っぽいですし、あまりホテルのフロントで言っても効果はないだろうとは思うのですが、そういうものが出てくるたびに、「ああ、これ使えないんだよな」と、ぼやくようにしています。ぼやくと、今のところは「ではサインで」とサインする紙が出てきたりするのですが、これがＡＩ対応になっていくとどうなるのかと思います。面白いことに「タッチパネル」は触るパネルなのに、触ることが一番必要な人が使えないのです。非常に腹立たしいネーミングだといつも思っています。

すみません、雑談ですが、メモをしたものをそのまましゃべります。小手川さんの三つ目の質問で、これも大変僕が気にしていつも考えていることをご指摘いただいてありがたかったのですが、日常と非日常をつなぐということです。これは今日の発表の皆さんに共通する部分だと思うのですけれども、確かにご指摘があったように、博物館、美術館で触る体験を

する。僕はそれが日常になってほしいと思っていますが、それが日常になるまでは相当時間がかかるし、「見学」という言葉があるように、普段、美術館や博物館を見て鑑賞するということをしているマジョリティの人たちが触る体験をするというのは、紛れもなく非日常なわけです。その非日常の体験をどうやって日常につないでいくかというところがやはり大きな課題ですし、そこができないと、それこそ博物館、社会が変わっていくということはないわけです。

僕がユニバーサル・ミュージアムの展示をするときにすごくこだわっている部分は、ユニバーサル・ミュージアムの展示には暗い展示場と明るい展示場を作るというところです。なぜ暗い展示場を作るのかというと、先ほどもちらっと言いましたが、特に大人は触る展示で「どうぞ触ってください」というしつらえにしていても、なかなか触ってくれないのです。それは見るということに慣らされているし、博物館では触ってはいけないという、ある種の常識が刷り込まれているからです。だから、触る展示なのですが、「いや、見れば分かるし、いいよ。触るのは子どもでしょう」という感じで、意外と触らないです。ですから、少し暴力的かもしれませんが、否応なく触る環境を作るということで、視覚を制限する。真っ暗にすることはなかなか難しいので、動線、誘導路は明るくしておいて、なるべく作品には光を当てないという照明の仕方をしています。そうすることによって、ぼんやりしているから、否応なく触ろうかとなればいいなというようにしています。

ただ、それで終わってしまうとやはり非日常で、「今日は暗いところで何かいろいろ触る変な体験をしたな」ということで終わってしまうのですが、それを日常につないでいくという意味で、暗い展示場で体験した後、実は最後は明るい展示場に戻るということをします。その明るい展示場では、自由に触ることもできるし、もちろん触らずに見るだけということもできるし、見ないで触るだけということもできる。まさに多様性ではないですが、そうい

う体験ができます。特に、先ほど申し上げたように、明るい展示場で触ってくださいと言っても触らなかったのが、暗いところで否応なくそういう体験をした後に明るいところに戻ってきたら、見るのもいいし、触るのもいいし、両方やるとさらにいいねというようになってくれるといいし、明るい展示場での体験が終わって外に出て、日常生活は明るいわけですが、そこにつなげてほしいです。暗いところで終わると非日常と日常が断絶していますが、その間に明るい展示場を挟むことによって、日常と非日常がつながるのではないかということです。これはまだ願望ですし、それがうまくいっているかと言われたら自信はないのですが、一応そういう配置をしています。

もう一つ雑談交じりに言うと、皆さんもご存じだと思うのですが、ダイアログ・イン・ザ・ダークという暗闇のソーシャルエンタテインメントがあります。これはドイツ生まれで、真っ暗闇で視覚障害の人がアテンド役となって案内して、視覚以外の五感をいろいろ使う体験をします。最後は暗闇で、ヨーロッパではアルコールが出るみたいですが、日本は多分まだソフトドリンクだけだと思うのですが、ジュースを飲みます。それも、普段は色を見てオレンジジュースだと思っていますが、色を見ないで飲んでみると意外と味が新鮮だったりするという暗闇の体験をするというプログラムがあります。これはすごくよくできているし、それゆえに世界中に広がっていると思うのですが、結構高いのです。今、五千円ぐらいします。僕も同じような暗闇体験のワークショップをするのですが、僕は大体ただでやっているので、何だよと思うのですが。そのダイアログ・イン・ザ・ダークは、すごくよくできているのですが、やはり小手川さんのご指摘ではないですけれども、非日常と日常がすぱっと切れているような気がします。暗闇でいろいろな体験をして、「今日は視覚以外の体験をして面白かったな」と思って、また外に出たら日常に戻る。何かそこをつなぐワンクッションが要るとずっと考えていたときに、自分がユニバーサル・ミュージアム展をするときは明

るい展示場を設けようということで対応しています。これは非常に大きな問いかけで、ここがうまくいかないとなかなか博物館、社会は変わっていかないと思うので、引き続き考えていきたいと思っています。

大石さんのコメントについては、二つお答えというか僕からのコメントを述べたいと思います。まず、冒頭に森を歩くお話がありました。これは僕もいろいろなところで話すのですが、僕はアフリカには全く行ったことがないですけれども、一昨年、元京大総長の山極先生とお話しする機会がありました。山極先生がゴリラの調査をしていて、夜、真っ暗になったときに、現地の人たちは何かの感覚でいろいろな情報を察知して、真っ暗だけれども自分の村まで迷わずに帰る。山極先生たちは真っ暗になるとお手上げで全然分からないので、現地の人の肩につかまってひたすらついていくということでした。

実は視覚障害ではなくて、サバイバルということでいうと、職人の手の力などもそうだと思うのですが、いろいろなところに触角センサーが残っていると思います。これも僕が言うと若干極論になりますが、スマホが普及してきて特に最近痛切に思うのが、ルート検索などは非常に便利なのですが、逆に言うとスマホが人間の自由を奪っているのではないかということです。そんなことを言うと言い過ぎかもしれないですが、かつてルート検索がない時代は、いわゆる野生の勘で、何となくこちらに行ったら目的地だとか、あちらは本能的にちょっと危ないみたいなことが結構判断できていたのですが、便利なツールを手にすることによって、そういうものが働かなくなっているという部分があるように思います。

それに関連して、おまえは偉そうなことを言っているけれどと言われるかもしれませんが、実は視覚障害の世界でも同じようなことがあります。皆さんもよくご存じの点字ブロックは日本発祥で、今、世界中に普及していますが、欧米と日本の明らかな違いがあります。日本は狭いし、ごちゃごちゃしているということもあるのですが、誘導ブロックといって、

線型のブロックをたどって行きなさい、そうすると安全だし、どこかに着きますよというものです。一方、駅のホームなどは警告ブロックといって点々のブロックです。これは注意喚起で、ここから先は危ないとか、階段の上り下りをするときに、ここから先は何かがあるという注意を促すブロックです。日本の場合は圧倒的に、こう歩いていきなさいという誘導ブロックが多いのですが、例えばアメリカなどだと基本的に誘導ブロックはなくて警告ブロックだけなのです。つまり、自由に歩いていいということです。危ないところには警告ブロックがあるから、そこにぶつかったら取りあえず止まりなさい、それにぶつかるまでは自由に歩きなさいということです。

日本の場合は、ごちゃごちゃしているし放置自転車もあるから、取りあえず誘導ブロックを敷いておくのでそこを歩いてくださいということです。ただ、三十センチメートル幅ぐらいの誘導ブロックの上を歩くというのは決して快適なものではないのです。皆さんに想像していただくと、平均台の上を歩いているようなもので、踏み外したらどうしようということになります。点字ブロックは確かに便利だし、あると安心するのですが、それによって琵琶法師や瞽女たちが発揮していた触角センサーが鈍ってしまうということもあるのかなという気がしています。

もう一つ、人類学と障害学のことについても少しお話ししたいのですが、大石さんが言ってくれたように、人類学の中で、いろいろなマイノリティを考えるという蓄積があるわけです。僕は最近はもう自分が何屋さんなのかよく分からなくなっていますが、障害学関係の論文を読んだり、そこから示唆を受けたりということはたくさんあるのですが、自分がやっていることが障害学というものに分類されることに対する違和感があって、僕はやはり人類学や歴史学の中で障害を考えたいです。結局それはなぜかというと、他のマイノリティとの共通性もあるし、そういうところとの比較検討で深められるのです。障害学というものが立ち

上がった歴史的な意義はあると思うのですが、何か「障害」という括り方で若干閉じてしまっている気がします。開いていない。だから、お金がもったいないということもあるのですが、障害学会に僕は入っていません。このプロジェクトに関わらせていただいているのもそうですが、今日、冒頭に床呂先生が趣旨説明をされましたが、本当に学際的ないろいろな分野の人が集まる中で、その中の一つのテーマとして障害を切り口にする。やはりこの路線の方が成果が出るし、比較検討もできるのではないかと思います。

今日は武道の話をすると言って、まだしていませんが、例えば合気道などを考えると、いろいろな流派があります。僕はその中の一つに視覚を使わない無視覚流という流派があってもいいと思うし、同様に、人類学といういろいろなテーマ、切り口がある中の一つとして障害があると考える方が発展性があるような気がしています。

すみません、だいぶしゃべり過ぎましたが、一度これでコメントに対するレスポンスを終わろうと思います。

（床呂） 広瀬さん、ありがとうございました。まだまだお話、議論が尽きない感じもありますが、いったん以上ということで、次は高橋さん、コメンテーターのお二方へのレスポンスをお願いしてよろしいでしょうか。

（高橋） はい、ありがとうございます。小手川さんも大石さんもずっと前から一緒にいろいろ議論させていただいていたので、コンテクストのところで共有されている部分も多分多くあります。ですので、今回新たにこういった質問を頂いてすごく面白いなと私も勉強になりました。

最初に小手川先生の方から、顔偏重社会というものについてもう一つ深いところでの議論を振っていただいたので、私が最後にスキップしたスライドに書いてあった言葉を少し読み上げさせてください。

#34

顔偏重社会と私が最初に問いかけて、それの回収として用意していた言葉ですが、ある意味で仮想的な共通記号としての西洋的顔概念のインフレーションであると捉えているのです。要するに個人の記号として顔を使うこと、さらに顔の記号として目と口の三つを使うこと。これはいろいろな階層に置いて記号化が行われています。ただし、この記号化のあり方が極めて西洋的顔概念のやり方に従っていて、そこにインフレが起きているということです。逆に言うと、それに従うことで、ある意味テクノロジーをうまく使えている部分があります。zoomをやっていて、お腹だけ見せる人がいてもなかなかコミュニケーションがうまく行きません。大石さんからお話があったように、実際に絵を描いてもらうと、自分の顔を描いてというところに内臓を描かれていた方がいるということでしたが、自分の個人の記号として内臓を使うことは、もしかしたらそういう人たち、そういう文化、そういうカルチャーがあってもいいのかもしれません。ただ、向こうの人たちから見て、絵文字を見て死んでいるのではないかという話があるように、われわれから見たら、例えば内臓だけ描かれているものを見せられて「これはどう思う?」と聞かれても、それは内臓だよというだけです。そういう感覚がもしかしたらあるのかもしれません。ただ、われわれは普通こちら側の視点しか持っていないので、そこにはなかなか気づかないわけですが、顔だけポンと取り出して個人を記号化している、あるいは目と口だけ取り出して顔を記号化している、そこにバイアスがかかっている。その記号化の仕方、要は個人の記号化の仕方として、ある意味で仮想的な共通記号としての西洋的顔概念を使っているということなのかと思います。

西洋社会がいつから顔を偏重するような、顔を個人の記号として使うようになったかは分からないのですが、例えば仏像などは顔だけということが多分あり得なくて、けれども胸像はすごく昔から、二千年前からあったわけです。顔だけの仏像は多分ないのではないかと思

います。大体仏像は全身がありますね。そういう意味で、顔だけ取り出して表現することが適しているコンテクストと、そうではないコンテクストがあるのだろうと思います。

大石さんのお話にも一緒にお答えしていますが、仮面の中にポンポンを使われたということで、アフリカの方で事物的顔が使われているのか、それともわれわれと全く違ったやり方での記号化が行われているのかというのはすごく議論の余地があるところで、これから突き止めたいところではあります。

一つの考え方としては、やはり記号化することそのものは、特に視覚を使った場合には非常に普遍的に行われていることです。記号化することそのものは非常に普遍的に行われていることであって、ただし、例えばポンポンによる個人の表現、個体の表現といった記号化がされているのかもしれないという可能性は感じています。

というのは、データの中で少し示したのですが、いわゆる物が顔に見えるというパレイドリア現象は、日本でやったときはほぼ百％顔に見えると答えられたのが、向こうでは五～六割だったりします。ただしあれはもう一つ裏話があって、あの写真を準備したのが私なのです。その時点で、私は心理学の実験者なのですが、顔に見えるものを選んで出して「顔に見えますか」とやっているわけです。でも、実はそのときに私は実験者であるけれども一人の人間でもある、しかも西洋的な社会の中で生まれ育った人間でもあるので、私にとって顔に見えるものを選ばざるを得ないのです。逆に言うと、向こうの人たちに顔に見えやすいものを選んでもらってそれを見せるという実験を同じようにしたら、逆に日本で答えてもらったら、それは顔に見えませんということになるかもしれません。ですので、そういう意味では記号化の作法というか、記号化の仕方のところに違いがあるのか、それとも、記号化をする傾向そのものにいろいろな多様性があるのか。そこはまだ分からないところです。非常に気になる問題ではあります。

実際に今年の夏に向こうに行ったときに、一緒に村を歩きながら、顔に見えるものがあったら教えてくれといってパレイドリア探しをしたのです。そうすると、少なくとも輪郭というものがないと顔とみなしてくれないのです。顔であるということには絶対に輪郭が必要です。つまり、オックスフォードの意味でいう事物的な顔として、その顔を捉えている。それが記号なのかもしれませんが、少なくとも輪郭が絶対に必要だということが判明しました。だから、目と口だけを置いて「これは顔ではないですか」と言っても、「いや、これは目と口だ。顔ではない」と。そういうやり取りを繰り返して、結局、私が「これは顔に見えますよね」と作ったものは目と口だけでできているものが多かったので、少なくとも輪郭がなければ顔というものにはならないのだということは、私とその私の友人の間では共有できました。

そういった形で、結局、共通記号が何らかの形で形成され、われわれの間では西洋的顔概念としての共通記号が使われがちで、そこの周りに、顔偏重社会に至っているのではないかということです。

さらにこのプロジェクトの話として言えば、そういったものにわれわれは振り回されてしまっているのです。例えばzoomを使ったコミュニケーションもそうですし、いろいろなテクノロジーの中で、共通記号としてこれを使っているのだからこれでいいではないかと、それを前提として人間を取り巻くシステムを設計しています。それが一度設計されてしまうと、それを受容してそれに合わせた行動をせざるを得ないようなことが起こってしまっているのが現代なのではないかと思っています。

#35

これが最後のスライドなのですが、それは私たちにはある意味ですごく不自然で、もしか

したらすごくしんどいことをやっているのかもしれないということを最近非常に思うわけです。この比喩が合っているのか分かりませんが、極めて厳格な標準語だけを使ってくださいということを言われているようなものです。私は関西ですが元々生まれは関東なので、ある意味、えせ関西弁なのですが、それでもみんないろいろなしゃべり方があって、いろいろな方言があります。その中で、このメディアの中では厳正なる標準語だけを使ってくださいというような行動を強いられているのかなと思います。顔身体というものは本当はもっと自由であって、われわれはいろいろな記号化の仕方もできるし、いろいろな使い方もできるのですが、ある意味で共通記号としてのものに乗せられているのかなというのをすごく最近感じています。

これをフィールドでの経験と知覚心理学の話から、いわゆるゲシュタルト心理学的なことを考えれば、われわれは物事を統合せずに認識せずにはいられないわけで、必ず何か視覚的なパターンがあったらそれをひとまとまりのものとして見てしまう、さらには記号化してしまうということは本質的にあるのだろうというところがあって、その記号化の仕方に非常に共通性を求められているということです。それは恐らく効率的なのです。システムを設計する側からすれば、みんなが標準の仕方でやってくれれば非常に効率的ですから、それはある意味、合理的なのですが、そこに全てを合わせていくというのは個人にとっては極めてしんどいです。そういった細かいところでのしんどさ、不合理さといったものが、このミクロなところからの分断につながり、分かっているつもりで分かっていない、自分と同じように見ている、自分と同じように捉えているという確信の下に動いてしまう。そういったところがいろいろな分断などにつながるのではないかと思います。

ですので、最後に言ったように、他者が自分と異なる仕方で世界を認識しているということを当たり前の前提として受け入れることが、まず出発点になるのかと思います。これは知

覚心理学をやっていると当たり前ではあるのですが、自分の日常の中でそれができるかというとなかなか難しいです。

もう一点だけ、小手川さんから感覚統合の話、聴覚情報に対して視覚情報がという話がありました。これも心理学の中では非常にたくさんの実験的な研究があります。もちろん音の解釈は、例えば発声している言葉も他者の口の動きの視覚的情報によって引きずられるというような話はたくさんあります。先ほど、暗闇の中での味覚の話が出てきたのですが、あれは感覚統合の話で、われわれは嗅覚も視覚もなしに物を味わおうとすると、普段とは全く違った感覚が得られます。有名な話としては、かき氷のシロップはみんな同じ味なのに色だけ変えて、これはイチゴ味、これはメロン味、レモン味といって、われわれはそれに納得して生きているということがあります。これもある意味、事物性と記号性の話で、聴覚は記号化しづらいわけではないのですが、記号化しづらい感覚である味覚や、比較的記号化しやすい感覚である視覚によって、味覚的情報や触覚的情報を記号化するようなことが行われているのかと思います。

広瀬先生から触角の話があって、触ることがとても豊かであるというところなのですが、恐らくそれは、触覚で記号化することはできないわけではないのですが、われわれはなかなかしようとしないのです。触ることでこれは何であるという判断をあまりしようとしない。触覚そのものがあまり訓練されていないので、仮にわれわれが今それを味わおうとすると、非常に記号化されていないような情報に触れることができたりする。そこがある意味、豊かさにつながるのかと思います。

これを視覚情報と一緒に触ったりすると簡単に記号化されてしまうのですが、昔のテレビ番組などであったように、触るものを隠して手を突っ込んで「これは何でしょう」と当てさせると、全然何でもないものなのですが、すごい思い込みによって極めて変な感覚が出てし

まったり、逆に、これは普通は絶対に触ったらいけないだろうというものでも、見ていないことで「これは何だろう」と触ってしまうなど、そういったことがたくさんあります。それを心理学の言葉で言うと感覚統合という話になるのですが、恐らくその背景には、記号化のしやすさ、しづらさみたいなことが感覚によって違うということがあるのではないかと思いました。この辺りにしておきます。ありがとうございました。

（床呂） 高橋さん、ありがとうございました。いろいろな論点で、先ほどの広瀬さんの報告ともシンクロする部分もかなりあるようなレスポンスで、興味深く伺いました。

それでは最後にケイトリン・コーカーさん、お二人のコメンテーターのコメントへのレスポンスをお願いします。

（コーカー） コメントを頂き、ありがとうございました。全ての質問に答えることはできませんが、順番に行くと、どうして一緒に生活することが大事だったのか、何も隠さない関係やさらけ出す関係はどうして大切だったのかという質問を受けて、自分も、どうしてなのだろうとまだ考え中なのですが、確かに、踊りを作る、共に舞台に出るということは、そのように考えると、日常生活あるいは長時間を共にしないとできないです。あるいは、何か隠していてはできないですし、結構深い信頼関係を作らないといけません。実際、死ぬかもしれません。金粉ショウでも、男性が「ハイッ」と私や他の女性を肩に乗せてぶるぶると回すのですが、「死ぬかも」という。モダンダンスでも、「これからこの男性の肩の上に立ってください」と言われたりします。自分が開かれていないとそういうことはできないと思うのですが、それが本シンポジウムのテーマと何の関係があるのかという接続点は自分でも考えている最中です。

お呼びいただいてとてもうれしくて、でも、やはりこのシンポジウムに参加したら、社会的な分断について触れずに話したら嘘をついているように感じます。しかし自分の専門では

なく、自分の経験や自分の感情しか頼りがなくて、研究というよりエッセイみたいなものを作ってきたのです。日常生活を共にしながら踊りを作るという、何か既存のもの、形のあるものをそのままポンと踊り手に出すというより、ちょっとした会話の中から出てきた発想や、その場にあるもの、衣装や小道具などと遊びながら踊りが生まれてくる。そういうことが非常に多いので、共に時間を過ごせば過ごすほど、そういう採掘ができると思います。

これは舞踏だけではなくて他の踊りでもそうなると思うのですが、例えばポールダンスの研究を始めたころは、舞踏をやっていたから非常にぎこちなかったです。舞踏をやっていると、「女性の踊りってどうやってするのだったっけ?」となるのですが、ポールダンスの振り付けをする方とお茶をして、どんなショーを作ろうかとなったときに、ユリ・ゲラーの話が出てきたのです。私はそのときにユリ・ゲラーの存在を知らなくて、「念じてスプーンを曲げるんですよ」と教えてもらって、ああ、そうなのかと。その会話の中から、「では、ポールダンスのショーはスプーンにしましょう」となりました。衣装は銀色の衣装で、それが最初に踊ったポールダンスのショーなのですが、あの作品はいいなと思いました。すみません、自分で自慢していて何かあれなのですが、こういうふうに踊りが生まれるのだなと。既存の様式化されたものというよりも、共にいるからこそ、お互いができる・できない、知っている・知らないものの中から何かが生まれてくる。そうなると、本日のシンポジウムのテーマとつながるところが、あるかどうか分からないのですが、一応、答えとしてはそうです。

それから、非日常の中でバランスが崩れるということを書いた質問を頂きました。外から客観的にというか、一般社会から見たら、群舞というものはみんながそろえて同じ身体的な形態を持って同じタイミングで踊らないと群舞にならないということに対して、でもそれぞれ体が異なっているし、それぞれの持っているものが違うから、むしろ今さんの舞台の中でタイミングや形がそれぞれ違っていて崩れていくことの方がバランスが取れている。矛盾し

そうな話なのですが、日常の中でどんどんバランスが崩れていって、自分の体、自分は一体何なのかという中で、非日常こそ、それと出会い直して再確認する。今、何を言っているか自分もよく分からないのですが、そういうものかなと思っています。それもあって、踊りの中で日常だったら不可能な出会いとつながりができて、いつも感心しています。

少し飛ばしますが、次の大石先生のコメントに行くと、すごく大きな質問で、社会的な分断があるのか、その超克をどのように考えたらいいのかという、私も誰かに教えていただきたいような質問なのですが、本日のシンポジウムを聞いて、特に広瀬先生のお話の中で、隔たりをなくすだけというわけではなくて、その人たちが異なっているからこそ、その特性を伸ばすための場所を作る。そのようなメッセージを捉えました。

それが次に考えていることにつながりますが、周縁性があったからこそ、その踊りができたというか、踊り手との関係ができた、もしくは踊り手と観客との関係ができた。そこで考えたのは、これは私の勝手な個人的な意見だと思うのですが、何かを変える、社会を作り直す、人間関係にまた違う観点から向き合ってみるという変化を起こすには村が必要なのです。英語でも変化を起こすのにvillageが必要だと言います。これは個人的経験による考えなのですが、日本の国立大学に就職して四年間ぐらいたって、准教授か教授かによってその割合は違ってきますが、女性教員は文系でも一割ぐらいです。数で著しいジェンダーギャップでもあるのですが、それもいろいろなジェンダーに関わる問題や暴力と直接関係していると思います。しかし、その数を半々にすれば急に変わるのかというと、その中で制度や、制度のやり方からの強い影響があり、例えばむしろ男尊女卑を内面化したり、ずっとこのようにしてきたからこういう対処の仕方だということが習慣づけられたりします。非常に強い制度と影響力のあるやり方の中で変化を起こす一歩を踏み出すのかという疑問もあります。違うやり方や違う生き方を構想していくために、むしろその強い制度の眼差しややり方の外に

あるどこかの方が、その人たちの特性を伸ばすことができるのではないかということも考えられます。

例えば、アメリカのヴォーギングという踊り方があります。日本でもはやっているみたいですが、一九七〇年代のボールルームのカルチャーの中で、黒人やラテン系の同性愛者たちが一人一人が美しく輝ける場としてその踊り方が作られたのですが、それを育てるための場があったからこそ、現代になって日本でも非常にはやっています。最近、ビヨンセが出した映画にも、その文化と深くかかわっている方々が出て輝いているということです。ヴォーギングの一般的なダンスの世界に対する影響と同様に、いろいろな日常の中の制度に対して外からできる関係性や、いわゆる文化を作り上げることで、どのように違う常識や違うバランスの取り方を持ち込むことができるかということに興味があります。取りあえずそんなところです。

（床呂）　どうもありがとうございました。それでは、以上でコメンテーターの方のコメントへのレスポンスは終了ということです。

ここからは、お待たせいたしました、一般のフロアの参加者の方からのご質問やコメント等をお受けしたいと思います。趣旨説明のときにもお願い申し上げましたが、本日の内容は文字起こしをして冊子化する関係で、差し支えなければお名前を言っていただいて、発言の際にスタッフがお近くに参りますので、ご発言の後に著作権の承諾書にサインを頂きます。お手数をおかけしてしまって申し訳ないのですが、ご協力をよろしくお願いします。

それでは、どなたでも結構です。質問やコメント、まだ三十分弱ぐらいは時間がありますので、いかがでしょうか。では、角の方の方から。次に、私から見て手前の黄色い方。

（村瀬）　今日はありがとうございました。ＡＡ研の教務補佐をやっております村瀬智子と申します。私はここで働いている他に、地唄舞花崎流の名取として活動を始めております。今

回の講演の中で、見えないものを見るというところに非常に関心を持ちました。というのも、琵琶法師や瞽女さんと同じように、地唄舞で地方という演奏を行う地唄の奏者は元々盲目の人たちが受け継いできており、明治以降に健常者の人たちも引き継ぐようになっていったという経緯があります。

その中で、もしかしたらそれまで盲目の人たちが口伝で楽譜等を使わずに引き継いできた微妙な心の表現や音の表現が、今は和式ではあるものの五とか四とか数字を使った楽譜によって画一化されたり、目が見えるがゆえの表現になってしまっているのではないかということを感じます。

同時に、私が舞を舞うときに意識しているのは「見ない」ということです。もちろん振り付けを覚えるときには見よう見まねなのですが、あえて目を使わないことや、視覚で確認するのではなく、体で視線を見せること、きちんと体が動いているのかを鏡で見るのではなくて体の動きや呼吸で確認するということをしています。ですので、地唄舞の活動等で、見えないものをあえて見るということがすごく重要だと感じています。

先ほど、「この子らから世に光を」という言葉がありましたが、視覚障害者の人たちが感じ取ってきたものを私たち健常者が学ぶということは、今まで日本の中で伝えられてきた西洋の記号や記号に縛られた音楽や心の表現、文字や記号に縛られた表現から昔の表現の豊かさを取り戻すということや、今まで画一化されてきたものの中に多様性を見出すということにつながるのではないかと感じました。コメントという感じになってしまったのですが、そのように思いました。ありがとうございます。

（床呂） どうもありがとうございました。広瀬先生へのコメントという形でよろしいですか。広瀬先生、今のご発言にレスポンスがあればお願いします。

（広瀬） いろいろな人に発言してもらいたいので、なるべく手短にお答えしたいと思いま

す。村瀬さんにご指摘いただいて、自分の言っていたことを補強していただくようで大変うれしかったです。

見えないものをみるというのは、別に視覚障害、盲目に限ったことではなくて、いろいろな例を挙げると、例えば能楽の複式夢幻能は、霊が出てくるわけですからまさに見えない世界をみるものです。そういうものはいくらでもあったわけですが、それが、すごく乱暴に言うと近代化の過程でだんだん圧殺されていく中で、最後の最後まで残ったのが幸か不幸か見えない人たちであったということなので、もっと見えないものをみるということの普遍的な意味を追求していくと豊かな世界があると思います。

もう一つ、特に邦楽の場合、僕は全く自分では演奏しないので素人ですが、節回しや拍子などを含めて、いわゆる西洋音楽の五線譜には落としきれないものがたくさんあります。それが、明治以降に西洋音楽が入ってくる中でだんだん邦楽が変質していったということもあります。その辺を琵琶法師や瞽女の歴史と絡めて、村瀬さんの知見なども頂きながら僕も勉強したいと思いました。コメントをありがとうございます。

（村瀬）　ありがとうございます。

（床呂）　ありがとうございました。先ほどの前の男性の方、どうぞご発言を。

（柿本）　群馬大学の柿本敏克と申します。専門は社会心理学でして、この分野ではよく偏見やステレオタイプの問題が出てきます。その中でも「集団間関係の心理学」の領域では、社会的アイデンティティ理論というヨーロッパで発展した理論があって、人間の集団行動についての代表的な理論だと認識されています。ヘンリ・タジフェルという人が中心となったイギリスのブリストル学派というところから始まって、私はこのタジフェルの学問上のひ孫ぐらいの立場に相当します。もう一方で、私は濱口恵俊先生という、日本文化に関係して『「日本らしさ」の再発見』を書かれた方の弟子でもあります。そういう点で、留学して西洋流の

社会心理学をやっていましたが、私の学問上の根本には濱口先生の言葉で言うと「間柄」などを重視する発想があります。

そういう人間が社会心理学をやっていて今回このシンポジウムに関心を持ったのは、「社会的分断の超克」というキーワードに惹かれたからです。私自身、ＳＤＧｓに関係するような研究をしています。まさにちょうどこのテーマで日本心理学会で公開シンポジウムを連続して企画・運営し、現在、書籍としてまとめる作業をしております。今回、そのテーマが重なっているとともに、「身体性を通じた」というところに関心と疑問があったのですが、今日お話を聞いていて、その一部は私なりに理解できたかと思います。

さて、お話を聞いていて、最初に発見というかすごく驚いたのは、広瀬先生の「触角を通じて世界を知る」という話題の中で、触れていく中で「情報を増やしていく」というお話です。時の流れと身体の流れとともに情報を増やしていくというご作業・ご操作をされている、それがユニバーサル・ミュージアムの仕掛けの一つということでした。

これは社会心理学だけでなく心理学一般でもそうだと思うのですが、人の情報処理の仕組みとしてカテゴリー化という作用があるとされています。これはごく一般的なものだと理解されていて、その理由の一つは、我々の置かれた環境の中には情報が多すぎるので、それを簡略化し、簡単にすばやく処理するためにカテゴリー化が必要なのだと理解されているのです。しかし広瀬先生のお話はその逆です。情報を増やしていくというプロセス、情報がない状態で情報を取るために触れていく、時間の流れとともに情報を取っていくというお話がありました。多分、カテゴリー化の前提は「見る」ということがあると思うのですが、「見る」ときに情報量が多すぎるから、それを減らすために、例えばこれは机である、床であるというように範疇化して見る。実際は机といってもいろいろな素材や光沢などがあるし、床にも肌理などがあるはずなのに、簡略化して床、机というように簡単にすることで適応するのだ

と理解されています。だから、「見る」ことの中には情報が多すぎるから減らすというのが前提で、カテゴリー化するという話になっているのですが、広瀬先生のお話では逆でした。

そして、ここが重要なのですが、一方で、ステレオタイプというのは実はカテゴリー化に基づいているという議論が主流です。ステレオタイプ化する、例えば人種問題で、「黒人はこうだ」、「日本人はこうだ」というのもそうですし、ジェンダーのステレオタイプもそうです。「男性はこうだ」、「女性はこうだ」というのもカテゴリー化の結果で、簡単にするために一人一人を見ずに大ざっぱに見るというのが根本になっています。そして、このステレオタイプが偏見、差別につながるのだというのが私たちの中では普通の議論です。そうではない情報の取り方、情報の処理の仕方があるとすれば、それはステレオタイプ化が起こらないメカニズムなのかなと感じたのです。つまり、カテゴリー化という働きがあまり起こっていない、従ってステレオタイプ化が起こらないのかなと感じたのですが、これに対して広瀬先生から何かお話、お考えを頂ければというのが一つです。

もう一つは、大石先生がご提起された「社会的分断の超克をどう考えるか」ということです。「誰一人取り残さない（no one left behind）」というこの用語そのものが問題だということもあったのですが、私なりの考えを述べて、皆さんはどうお感じになられたのかをお尋ねしたいです。基本は、「分断は結局コミュニティを破壊して紛争を生じさせる」、「統合されなくなることから協力関係がもてなくなる」というのが大問題なので、そうならないように何とかしましょうというのが、社会的分断が問題視されていることかなとごくシンプルに思っております。そうすると、分断という言葉は少しネガティブな言い方かもしれませんが、違うことそれ自体はそんなに悪くなくて、協力関係が取れるのであれば違っていていい。特に文化という考え方はそうです。そもそも、それぞれに固有の文化があって、それがなくなるグローバル化は駄目だという主張もよく聞きます。だから、違いがあって、かつ協力でき

るのであれば、それで分断のネガティブなところは乗り越えられている、だから協力関係が取れなくならないようにしよう、というのが根本なのではないか。すごくベタな意見ですが、私はこういう考えを持っていますが、このことについて何か感想をいただければ嬉しく思います。

（床呂） ありがとうございます。そうしますと、前半は広瀬先生、後半は、もちろん広瀬先生も含めてでいいのですが、他の発表者も含めて、あるいは他のフロアの方からご発言いただいてもいいかとも思います。まずは前半のコメントというかご質問、ステレオタイプやカテゴリー化を形成する方向に行かないような情報処理のあり方みたいなことと、広瀬先生がおっしゃった触角を通じて世界を見ていく、知っていく、時の流れとともに情報を増やすということの関係などについて、広瀬先生、いかがでしょうか。

（広瀬） さあ、困りました。何を答えましょうか。多分、大したことは言いませんので高橋さんに後で補足してもらった方がいいかなと言っておきますが、すみません、先ほど村瀬さんにコメントをもらって、一つ言い忘れたと思って、そこからつなげていきたいと思います。

今日は人類学の人もたくさんいらっしゃって僕より詳しい人がはるかに多いと思うのですが、日本の能面などを含めて、結構、仮面は視覚を制限する、すごく視野を狭めるということがあります。中には目がない仮面もあります。それは、視覚を制限することによって、例えばトランスに入りやすくする。能面の場合もそうで、必要最小限の安全を確保しなければいけないので少しは見えるけれどもほとんど見えない状態にまで視野を狭めることによって集中力を高めたりします。また、能楽師の人と実際に話したことがあるのですが、見なくても舞台の端に行けば何となく空気が変わるのが分かるのだということでした。僕は全然分からなかったのですが、確かにあるところを制限することによって、他の感覚が伸びるということはあるわけです。武道などの場合だと、視覚は情報が多すぎるので、それがノイズに

なってしまうことがある。ノイズキャンセリングではないですが、そのノイズをキャンセルすることによって触角センサーが働き出すということがあって、僕自身がそういう体験を、自分が見えなくなってからずっとしてきたと思います。

そこで思うのは、自分が幸か不幸かずっと視覚が制限されている状態だから、いわばこれが当たり前のところから出発するわけですが、例えば仮面にしても今日の暗闇体験もそうですが、ある種の非日常というか、制限するという条件を設けないと人間はそのようにならないのかということを感じるわけです。だから、自然の状態、例えば明るい状態で、すぐに触ってなるほどと思えるかというと、なかなかそうはならないのです。制限しないとそういうことができないのかという疑問と、そこをどうすればいいのかということを考え続けています。

ご質問にあったことで言うと、カテゴリーというのはすごく乱暴な言い方をすると、ご指摘のとおり、マジョリティの価値観でカテゴリーというものが作られているわけですから、土台、そのカテゴリーに当てはまらないマイノリティの way of life があるわけで、そこを掘り起こしていくということも、ここのプロジェクトのやるべきことなのかなと考えていました。すみません、難しいことは高橋先生に。

（床呂）　高橋さん、では、難しいことに対して応答を。

（高橋）　おっしゃるとおり、カテゴリー化はある意味で効率的に物事を理解するために使われているというのは間違いなくあると思うのですが、私はそれは認識の一つの側面だと思っています。逆の側面も多分あって、当然、このプロジェクトの議論に乗せて言うと、例えば人種やジェンダーなど、知らない人にぱっと接したときに、この人はどういう人だということを推測するためには恐らくカテゴリーを使います。それこそまさにステレオタイプだと思います。

しかし、その後にその個人と長く付き合っていくと、そのカテゴリーのカテゴリー性は実際にどんどん消えていくと思います。例えば最初はアメリカ人であるとか、タンザニア人であるということをもって「こういった人なのだろう」と思っている。それはカテゴリー化の「ある意味で」優れた能力でもあり、副作用を持った話でもあります。しかしそれは、広瀬先生の長く触るということにもかなり近いところはあるのかもしれませんが、長く個人と付き合う、あるいは文化と長く付き合ううちにミクロな情報がどんどん見えてくるのです。

私はタンザニアに初めて行ったとき、四十歳前だったのですが、やはりいろいろなステレオタイプがものすごくありました。いろいろな人からも聞かされることがあって、怖いと思ったのです。しかしフィールドの人たちを見ていると、全然そんな感じはなかったです。その初めて村に行ったときに感じたことは、当然、最初はすごくタンザニアの人たちというステレオタイプを持っていたのですが、一人一人と一週間、二週間と付き合うわけです。そうすると、よく話を聞いたりして付き合っていると、日本人というのもまたステレオタイプですが、ある意味で日本人よりもよほど日本人的であるタンザニアの村の人がいる、となってくるのです。それは結局、最初に作ったカテゴリーがだんだんこの個人に関しては薄れていって、ミクロな部分が見えてくる。単にカテゴリーでステレオタイプとして理解するのではなくて、長く付き合う、あるいはいろいろな付き合い方をする中で、カテゴリー化の瞬時の認識とは逆の側面がだんだん現れてくるのだろうと思います。机にしても椅子にしても、最初はそれは机なのですが、ずっと十年間、二十年間を共にした机はやはりただの机ではなくて、ある意味ではカテゴリーとしての机を越えた存在としてわれわれに現れてくると思います。だから、瞬時に記号化するのは、効率的で標準化するには都合がいいのですが、それ以上のものを恐らくわれわれは日常的にやっているのではないかと思います。ただ、世の中を一様に捉えようとするとそのカテゴリー化の側面がすごく際だって出てくるのかなという

ことは感じています。ただ逆に、このプロジェクトで目を向けていくべきは、そのカテゴリー化の逆の作用、広瀬先生がおっしゃったような時間をかけてみる過程で何が起こるのかなど、カテゴリー化の逆の側面のところに目を向けられるといいのかなと思いました。ありがとうございます。

（床呂）　コーカーさんもお願いします。

（コーカー）　私も協力ということについて少し返事がしたいです。協力があれば社会的な分断があっても問題ないのではないのかというご指摘に関してすごく思ったのは、また自分自身の話になってしまうのですが、アメリカに住んでいるときに、白人ですし、ジェンダーが女性なので、女性の役割に納得すれば結構特権的な身になって、それで周りの他の人たちが遭っている差別が見えなくなるのです。特権を持っている人たちには差別がどのように働いているのかが不可視になってしまっていて、その構造が非常に興味深いと思います。もしかして説明してもらっても分からないようなすごく深いレベルの不可視化です。

日本に来ても、もちろん特権的なところはまだあります。例えば、私が留学生として大学院に申請するとき、ひどい話ですが、欧米人で白人だから、多分、指導の先生は他の国の留学生より申請書を見てくれると思います。しかし、特権を持って申請している私はそれを見ていないのです。「やった、大学院に行けた」となっています。そういう働きがあります。

今度、日本に来たら逆になってマイノリティになる部分がたくさんあるのですが、周りから、この感覚や遭っていることは分からないだろうと思います。しかし、特権的な身の部分もあるから少し余裕があって、最初のころは「ああ、こういうふうに感じるんだ」と、面白かったです。悪いことをすると予測されると、何かちょっと悪いことをしたくなるというような、すごくいろいろ不思議な感覚を味わえました。でも、今まで十七年間この社会に住んでいて住み続けたいから、やはりいけない、何か変えないとこれはしんどいと思っています。

では、特権性を持っている人たちはどうしたら不可視の問題のある部分が見えてくるのか、分かってくるのかという問題も非常に興味深いと思っています。フェミニズムの議論でも、フェミニズムは白人女性が自分のために活動しているということになって、それで黒人女性の人たちは「えっ、私たちも女性なのだけれど」というようになっています。それが議論になってから今でもフェミニストたちにとって、intersectionality、交差性をどう考えられるのか、そもそも連帯は作れるのか、coalition ができるのか。また、トランス女性は女性だという認識をどのようにちゃんと共有できるのか、トランス女性へのヘイトをどのようになくすことができるのかという課題もあります。要するに、今のコメントを聞いて次のことを思いました。特権的な身の人々にとっては構造的な差別が不可視化されており、それによって特権的な身ではない相手が直面しているリアリティが見えない、どうしてもわからないというところがあります。この状況の中で、そもそもどのように協力できるのかというのはずっと大きな問題だと思います。

（床呂） ありがとうございます。

実は早いもので、あっという間に予定時間になっているのですが、大変密度の濃い議論が続いていて、多分会場の皆さんも、ぜひこれだけは聞いておきたい、これだけは発言しておきたいというような方があと何人かいらっしゃるのではないかと思います。登壇者の先生、よろしければ、あと十分程度延長させていただいても大丈夫ですか。ありがとうございます。

それでは、あと二人か三人ぐらい、会場の方で。では先に手を上げていただいた工藤さんから。

（工藤） 東京大学総合文化研究科の工藤と申します。現在東京大学の教養学部では、身体運動・健康科学実習という実習授業を担当しています。この実習は、一九九一年に実施された大学設置基準の改正以前においては、「保健体育講義／体育実技」と呼ばれていました。本

プロジェクトのタイトルに「身体性」という言葉が入っていますが、体育というのは身体に直接働きかける教科です。広瀬先生の今日のご講演の中で、インクルーシブという言葉に対して違和感を覚えるという話がありました。また、Nothing about us without us という理念は、重要であるけれども、一方で危険性を伴っているということ、また障害学という形で領域を閉じてしまうことに対する違和感を持たれているということでした。これはまさに体育という教科の中で健康という言葉にもあてはまるのではないかと思いました。体育の世界で用いられる「健康増進」「体力向上」といった言葉など、われわれはそれが当たり前のように重要であると認識しており、その認識ゆえに、ときとして無意識のうちに天下り的に健康の重要性を説いてしまうことがあるように思います。学生を含めて健康が重要でないと感じている人はおそらくごく少数であり、「健康が大事である」という言説に対して正面から反論できる人はおそらくさらに少数となるでしょう。そうであるからこそ、健康に関わる教育を行うものとして、ある意味で「特権的」な言葉を利用していることを明確に意識し、注意深く教育活動を行う必要があると感じています。

また、健康や体力という概念は、一つの尺度となって、人々を序列化するためのツールにもなりうることに留意する必要があります。スポーツの世界には、他者よりも秀でて強くなって勝つことを良しとする強固な価値観があります。また私たちも、国際的に活躍する選手を見て心を動かされ、誇らしく思い、励まされることがしばしばあります。そのこと自体は一つの価値観として認めたうえで、それだけではないオルタナティブな価値観もあることを認識する必要があると私自身は感じています。

先に述べた、健康という特権的な言葉に基づいて、健康を自認する教員、あるいは健康になるための知識を有する教員が、健康になりたい人々を指導するという場としての体育授業が前者の一方向的な価値観に基づくとするならば、もう一つの価値観とは様々な立場を肯定

するものになるでしょう。すなわそれは、本日ケイトリン先生が言われていたように、あなたはあなたでいいのですよということを教育の中で学生に伝えていくことではないかと思います。そのために体育が行うべきこととして、まず自己肯定があり、自分を大切にするという気持ちの延長として他者を肯定し、他者を大切にする、という教育があるのではないかと思います。これらの自己肯定と他者肯定によって人々が支え合うという関係を形成することが、先の違和感の克服につながり、さらには本プロジェクトの目的である多様性の実現や社会的分断の超克につながっていくのではないかと考えます。

以上の話は体育の世界に閉じた特殊な話ではなくて、きわめて高い普遍性を有するものであるという感覚を持ちました。広瀬先生やコーカー先生のお話にあったような、一見すると特殊で周縁的な事態を掘り下げると、そこに出てくるのは単一の価値観や認知様式に対する違和感とその克服に向けた挑戦という、普遍的価値を有するプロセスが浮かび上がってきます。ある文化の中で一般的であると考えられてきた顔の認識様式が、他の文化においては全く一般的ではないという高橋先生のお話もまた、単一の価値観に対する疑問と捉えることができます。これらの話題がみな、多様性と共通性を併せ持つ身体という起点から語られていたことも重要な意味を持ちます。身体化された認知様式としての「当たり前」を変えていくことは、その認知様式が習慣化され無意識化しているがゆえに困難ではありますが、一方で身体化されていることが明らかになった時点で、そこから解決の糸口が見えてくるのではないかと感じています。本日は大変貴重なお話をありがとうございました。

（床呂） ありがとうございました。今日のシンポジウム全体、もしくはプロジェクト全体にも関わってくる大変貴重なご提言、コメントだったと思います。ありがとうございます。登壇者の先生からもレスポンスされたいかもしれませんが、なるべく多く会場の方から感想なりご質問があれば先にそれをあと何人かお受けして、その後でまた登壇者の方からレスポン

スを頂きたいと思います。

先ほど工藤先生の後ろの黒い衣装の方が手を上げていました。申し訳ありません、若干手短に言っていただけるとありがたいです。

（和田） 承知しました。ありがとうございます。東京大学博士課程の和田吾雄彦アンジェロと申します。私はショーパブを中心に風俗エンタテインメントの研究をしておりまして、特にコーカー先生に質問させていただきたいのですが、コーカー先生の今回のご報告は、「ダンス村」で共に時間を過ごすことによって、一つのダンスという芸術作品を作ることに向かって、互いの身体がより良い協働性を成し得るように身体を鍛錬していくような、そういうモメントに注目したものであったのかなと理解しました。ただ一方でダンスを考えていくときに、やはりダンサーと客の関係にこそ大きなヒエラルキー的な分断があるように思い、またそこにダンスがその分断を乗り越えるような契機があるようにも思いました。そのとき私が想起しているのは、やはりショーパブにおける風俗エンタテインメントとしてのダンス、酒のつまみとしてのポールダンスなのですが、そうした場でダンスを披露するダンサーは単発で招聘されていて、客やスタッフとの関係が希薄で、まさに単身でその場に立っているわけです。それでも客の眼差しの先でダンサーが宙を舞っていると、その場が熱を帯びるのを感じるときがあります。そうしたときに、例えば私たちが美術館で既に価値づけられたものを見てそれに感動するのとは違う何かがあるように思っています。場が熱を帯びるそのときに、分断が何か乗り越えられているのではないかという気もするのです。このとき、その分断の乗り越えは身体的なレベルでどのようになされているのだろうというのが、本日コーカー先生のお話を聞いていて思ったことです。

（床呂） ありがとうございます。今のはコーカーさんへの割とスペシフィックな質問ですので、申し訳ないのですが短めにレスポンスを頂ければと思います。

（コーカー） 非常に美しいコメントをいただきありがとうございました。もう1回お名前を伺っていいですか。

（和田） 和田と申します。

（コーカー） 和田さんですね。和田さんのショーパブの見方が非常に心に響いていて、おっしゃるとおりだなと考えながら聞いていました。そこがポイントで、場の雰囲気が変わるとか、そこで特別な瞬間があるのは分かるのですが、身体的なレベルでどうやってそれができているのかが非常に興味深いです。それも場所と地域と運営側のやり方とダンサーそれぞれのポールダンスへの取り組み方などいろいろな要因があって、それぞれの身体でしかできないようなつながり方があると思うので、ぜひそれを研究していっていただきたいです。ご活躍を楽しみにしています。

（床呂） ありがとうございます。それでは申し訳ないのですが、次で最後のご発言とさせていただければと思います。コメントなりご質問なり、そちらの手を上げられた方、どうぞ。

（石黒） 私は、だいぶ立場が違うような気がするのですが、お茶の水女子大学の舞踊教育という学科を立ち上げて、実践の立場から舞踊理論を進めてきました。最近は宇宙ステーションで舞踊をするという実験に関わりました。現在、その資料の整理中で分からないことも多く、今回のマクロとミクロのという視点にひかれて参加させていただきました。ありがとうございます。

（床呂） 先生、お名前をお伺いしてもよろしいですか。

（石黒） 石黒節子と申します。

（床呂） はい、ありがとうございます。

（石黒） 舞踊のテーマなので非常に興味を持ちました。私の教え子にも、それこそ舞踏の大駱駝艦や大野一雄、土方巽氏に師事した人がたくさん出ています。その人たちに共通してい

えるのは、文章を書くのはとても上手なのですが、しゃべるのが少しスムーズではないということです。でも、舞踏を通して、本人の情動がすごく発散されているような気がします。舞踏はドイツ表現主義という、二十世紀の初めに内面の主観的表現に重きを置いた芸術運動から発展しました。きっと、あなたがやっていらっしゃることがバレエや他の舞踊ではなくて、そこに近いのかなと思います。今、宇宙ステーションでやったダンスの資料を整理しているのですが、ミクロ、マクロという言葉が出ていたのです。そこに悩んでいて、ダンスのコミュニケーションはやはりミクロの中でされているような気がしています。ミクロのコミュニケーション、量子学的になどといわれるもので、よく分からないのですが、そういうことがなされているということです。

舞踊にはそういう目に見えない、でも宇宙に存在するミクロの素粒子レベルのコミュニケーションがあるのだということが、想定されます。でも、今は不明なので、皆さまのお話を伺い、いろいろとまた勉強させていただきたいと思います。

Ⅴ　閉会

（床呂）　ありがとうございます。他にも恐らくご発言されたい方、質問やコメントをされたい方がいらっしゃるのではないかと思うのですが、この後、実は情報交換会というか懇親会を予定している関係もありまして、会場の撤収と移動もありますので、申し訳ありませんが以上で本日のシンポジウムは終了とさせていただければと思います。まだ話し足りない、聞き足りないという方は、ぜひ懇親会に顔を出していただいて、登壇者の方に引き続きお話を聞いていただければと思います。

それから、今回が第一回ですが、われわれの今回のプロジェクトで、引き続き、毎年シンポジウムや、趣旨説明でも申し上げましたように、まさにダンスやボディワークに参加者の方々にも一緒に参加していただくようなワークショップも考えています。ＡＡ研のホームページ等を定期的にご確認いただいて、関心がありましたらぜひご参加いただければと思います。

ということで、本当に皆さま、長時間ありがとうございました。特に登壇者の先生方、三人のご発表者、それからコメンテーターのお二人、本当にありがとうございました。

「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」公開シンポジウム（第一回）
日本学術振興会・受託研究課題「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」（学術知共創）
『身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現』
二〇二三年度　公開シンポジウム
共催　ＡＡ研基幹研究人類学「社会性の人類学的探求：トランスカルチャー状況と寛容／不寛容の機序」

編　　集：床呂郁哉
編 集 補 佐：大村優介
発　　行：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒一八三―八五三四　東京都府中市朝日町三―一一―一
ＴＥＬ　〇四二―三三〇―五六〇〇
ＦＡＸ　〇四二―三三〇―五六一〇
ホームページ　ＡＡ研 http://www.aa.tufs.ac.jp/
ＪＳＰＳ課題（身体性）https://osde.jp/index.html
発　　行：二〇二四年九月二六日
表紙デザイン：本田直美
印 刷 ・ 製 本：株式会社ワードオン
〒三三五―〇〇〇四　埼玉県蕨市中央七―五六―三
ISBN 978-4-86337-536-9
表紙写真提供：肉野ハラ美

ISBN 978-4-86337-536-9

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所